

朝倉城跡Ⅰ

— 第1・2次調査報告書 —

2017.7

高知大学人文社会科学部考古学研究室

高知市

朝倉城跡 I

— 第1・2次調査報告書 —

2017.7

高知大学人文社会科学部考古学研究室

高 知 市

例言

1. 本報告書は、高知県高知市朝倉丁109・110番地に位置する県史跡・朝倉城跡に対して2015(平成27)年9月17日から23日まで実施した第1次調査および2016(平成28)年9月15日から25日まで実施した第2次調査の報告書である。
2. 本調査は国立大学法人高知大学教育研究部人文社会科学系(担当:宮里修)が実施した。本調査はまた高知市史編さん事業の一環でもあり、高知市からの支援を受けた。
3. 調査の体制は以下の通りである。
調査主体:高知市史編さん委員会考古部会,高知大学教育研究部人文社会科学系
調査担当:高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門 講師 宮里 修
4. 測量基準杭の設定は株式会社アンプルに委託した。
5. 現地調査および整理作業には以下の諸氏が参加した。
宮里修(高知大学人文社会科学部講師),甲斐友太,三輪紘士,田中寧音,濱田光,山崎美希(以上,1(12)期生),濱岡尚志,藤本慧昌,大倉明生,下木千佳(以上,2(13)期生),稲垣直也,永井徹,飯田悠衣,亀田さくら,登綾音(以上,3(14)期生),田村和博(高知大学学生),マリア・ロマノヴァ(国費留学生)
6. 本報告書の執筆・編集は宮里 修が担当した。
7. 本報告書の写真は宮里修が撮影した。
8. 調査の過程で以下の諸氏・機関からご助力を賜りました。記して感謝いたします。
石本健一,今田充,梶原瑞司,坂本裕一,筒井秀一,中井均,中内勝,弘田五郎,深田芳郎,松田直則,
森田尚宏,横山藍,吉成承三
朝倉城跡保存会,朝倉城山城八幡宮,北城山公民館,北城山町内会,高知市教育委員会民権・文化財課,
高知県教育委員会文化財課,高知県埋蔵文化財センター

凡例

【構成】

1. 「調査の経緯・経過(第I章)」「測量調査(第II章)」「発掘調査(第III章)」の順に調査内容を報告した。考察編を第IV章として付し、末尾に「参考・引用文献」を掲載した。
2. 「写真図版」は巻末に掲載した。

【記述】

1. 現地調査で設定した4m間隔のグリッドを位置表示の基準にした。グリッドは南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を割り当て、北西角の交差点をグリッド名(例:A1グリッド)とした。
2. グリッドは、委託により設置した基準杭(TB1)をE8杭とし、世界測地系に基づく座標北(G.N.)を南北方向の軸として設定した。
3. 文中では写真図版を「Pl.～」と指示した。
4. 本文中で掲載遺物に言及する際は数字を太字で示すか、()内に遺物番号を記した。

【遺構】

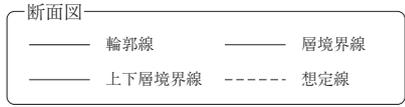
1. 遺構をSD(溝)、SK(土坑)、P(ピット)と区分した。
2. 遺構平面図の向きは図中の方位記号で示した。
3. 重複関係を示す「切る」「切られる」の用語は、新しい遺構が古い遺構を壊す場合は、新しい遺構が古い遺構を「切る」となり、古い遺構が新しい遺構に「切られる」となる。
4. 「掘方」は坑^{あな}の形状を示す語で「台形」「弓形^{ゆみなり}」などと表現した。「台形」は上に開く台形の意で使用した。底から立ちあがりにかけての箇所が丸味をもつ場合には「隅丸台形」とした。「弓形」は丸みのある底から屈折なく立ちあがる形態を指す。
5. 覆土には遺構に埋まった土の堆積状況を記した。覆土の色調はMunsell方式による『新版標準土色帖』に基づき記述した。可能な場合は大別層位を記した。
6. 個々の遺物の詳細は〈遺物観察表〉に記した。
7. 遺構図の縮尺は40分の1とし、各図面にスケールを示した。

【遺物】

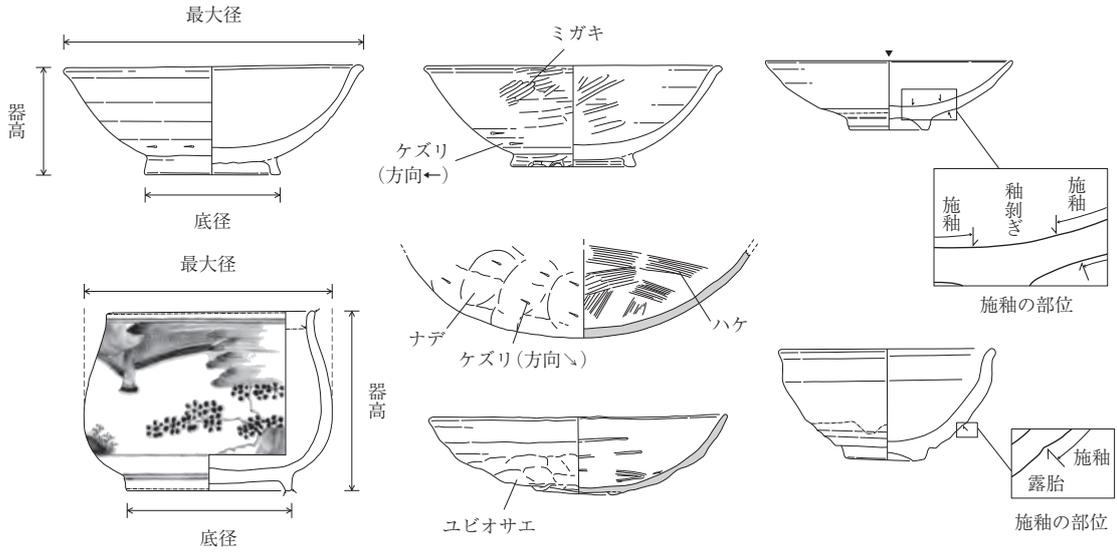
1. 出土遺物は全体に通し番号を付した。
2. 遺物は、素材や製法の違いから次のように分類した。[白磁][青磁][青花][染付][磁器][陶器][炆器][須恵器][土器][鉄器]
3. 出土遺物は縮尺を4分の1とし各図面にスケールを示した。
4. 反転復原した図面には図の中心に▼を印した。
5. 施釉の範囲を片羽矢印で示した(凡例図)。
6. 土器・陶磁器の部位は「外～」「内～」と指示した。口縁の内面が「内口縁」、胴部の内面が「内胴」など。

凡例図

【遺構】



【遺物】



本文目次

第Ⅰ章	調査の経緯・経過	1
第1節	遺跡の概要	1
第2節	調査の経緯と経過	1
第Ⅱ章	測量調査	4
第1節	地形測量	4
第2節	施設物等の測量	4
第Ⅲ章	発掘調査	6
第1節	発掘調査調査の経過と内容	6
第2節	検出遺構	10
第3節	出土遺物	11
第4節	遺構と遺物についてのまとめ	13
第Ⅳ章	考察：朝倉城跡の曲輪配置について	15
第1節	朝倉城跡研究史抄	15
第2節	朝倉城跡の曲輪配置	20
第3節	小結	23
	参考・引用文献	27

挿図目次

第1図	朝倉城跡の位置	1
第2図	朝倉城跡と周辺の遺跡	2
第3図	グリッド配置図	5
第4図	調査坑の位置	6
第5図	T1平面図・断面図	7
第6図	T2平面図・断面図	8
第7図	T3平面図・断面図	9
第8図	朝倉城跡第1・2次調査出土遺物	11
第9図	地検帳区割り比定図	15
第10図	「朝倉古城址之図」(安岡 1935)	17
第11図	朝倉城跡の曲輪配置	21
第12図	朝倉城山の地形と斜面境界施設	22
第13図	朝倉城下町空間概念図	23
第14図	朝倉地区ホノギ推定位置図	25
第15図	中世城郭分布図	26

写真図版目次

写真図版1	遠景写真	31
写真図版2	朝倉城跡の各部	32
写真図版3	測量調査風景	33
写真図版4	T1設置状況・SK1・SK2・SD1他	34
写真図版5	T1完掘状況・土層断面	35
写真図版6	T1土層断面・T2調査経過	36
写真図版7	SD2・T2完掘状況	37
写真図版8	T2完掘状況・土層断面	38
写真図版9	T2土層断面・T2調査経過	39
写真図版10	作業風景・現地説明会他	40
写真図版11	T1・T2・T3出土遺物	41
写真図版12	詰ノ段北斜面収拾遺物・表採遺物	42

表目次

表1	出土遺物観察表	13
表2	朝倉城跡関連年表	24

史料目次

史料1	朝倉城跡関連の地検帳	15
-----	------------	----

付図 朝倉城跡詰ノ段測量図

第 I 章 調査の経緯・経過

第 1 節 遺跡の概要

朝倉城跡は、高知県高知市朝倉城山に所在する戦国時代の山城である。全体の規模が大きく、また堅堀・横堀など四方に配置された防御施設は大規模な土木工事を要する長大なものであり、朝倉城跡が往事の拠点的城市であったことを示している。早くに県史跡に指定されたこともあり堀や土塁などの構造物は遺存状態が良好である。県内では、戦国時代の土佐七雄に数えられる本山氏が高知平野進出の拠点としたことで知られている。

朝倉城跡はいの町音竹から高知市朝倉城山にかけて東西に長く延びる丘陵の東端部に位置し、標高 106m を頂点する一帯の尾根とその斜面に曲輪や堀がひろがる。城郭の範囲は東西約 390m、南北約 220m とされているが、かつては果樹試験場方向にも土塁がのびており城郭はさらなる広がりをもっていた。

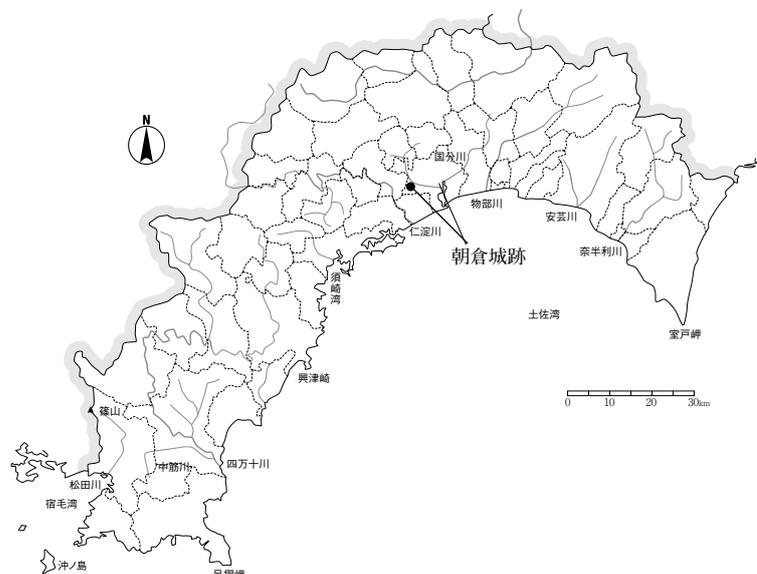
朝倉城跡の南に位置し、現在果樹試験場となっている朝倉城山遺跡は弥生時代中期の竪穴住居址が発見された高地性集落であり、また北の赤鬼山からも弥生土器が発見されている。神田川流域の柳田遺跡、鴨部遺跡、御手洗遺跡は弥生前期～中期の集落であり、鴨部遺跡では縄文時代晩期の資料も発見された。朝倉一帯にはウグルス古墳、勘平山古墳、船岡山古墳など古墳の存在も知られ、朝倉城山の北には土佐三大古墳のひとつである朝倉古墳(7世紀)が築造されている。古代には式内社でもある朝倉神社があり、神田ムク入道遺跡では中世前半の集落(屋敷)も見つかっている。

縄文時代晩期以来、朝倉地区では各時代の人々が活動の痕跡を残してきたが、歴史上、朝倉地区が最も活況であったのは戦国時代でありその中心に朝倉城があった。朝倉城は 16 世紀前半に本山氏が高知平野進出の拠点とし、16 世紀の後半には長宗我部氏が西方侵出の拠点とした城郭である。高知平野の西端をおさえる地政学上の利を持ち、眼下の鏡川と神田川に挟まれた空間(平野)には、ホノギから都市空間の形成を読み取ることができる。周囲には鶴来巢城跡、鴨部城跡、恵美城跡、神田城跡、神田南城跡、杓田城跡など、本山氏の配下あるいは敵対勢力の城郭がそれぞれネットワークを結び、本山氏と長宗我部氏の直接対決では合戦の舞台となった(朝倉合戦、永禄 2 年)。いまだ本格的な調査が行われていない朝倉城跡にはまだ見ぬ歴史の発見が期待される。

第 2 節 調査の経緯と経過

朝倉城跡は昭和 28 年 1 月 29 日に高知県史跡に指定され、「高知県下の中世城郭では国指定候補の随一」(荻他 2001)とされるなど、早くから遺跡の重要性が認識されていた。また地元では予てより「朝倉城跡整備推進委員会」の活動があり、地元町内会が清掃活動を行うなど、地域に親しまれ保全されている。

遺跡としての重要性が認識されながらも、朝倉城跡に対する調査は文献資料の整理や縄張り図の作



第 1 図 朝倉城跡の位置



第2図 朝倉城跡と周辺の遺跡

成にとどまり、本格的な測量調査や発掘調査は実施されてこなかった。

筆者は予てより、高知県での考古学による地域研究および文化財の保護・活用には、遺跡の質・量ともに良好で、『長宗我部地検帳』という一級の史料が活用できる山城に積極的に取り組むべきと考えていた。高知大学における活動を開始するにあたり(2015年4月～)、高知大学朝倉キャンパスに隣接する朝倉城跡こそ地元の大学が継続して取り組む調査・研究の対象に相応しいと考えた。調査の意義・方法・展望等について高知市教育委員会・高知県教育委員会と協議を重ね、朝倉城跡に対する長期的な調査計画の策定し(後に4年を1期とする5期の調査計画を高知市・高知県に提出した)、文化財保護法に係る手続きを経て、2015年度夏期、朝倉城跡の第1次調査にいたった。折しも『高知市史』の編纂に加わった時機でもあり、市史編纂のための調査とも位置づけられた。

第1次調査は2015年9月17日～23日に実施した。対象区域を詰ノ段として、遺跡の現状を記録するための測量調査、および遺跡の遺存状態を把握するための確認(発掘)調査を実施した。経過は以下の通りである。

- 9. 17(木) 現場設営。事前に委託設置した測量基準杭(TB1・TB2)をもとにトータルステーションでグリッドの設定を開始。調査坑T1, T2(未実施)を設定。
- 9. 18(金) 測量は等高線測量班と曲輪測量班に分かれ実施。現状変更許可の関係で発掘は実施せず。
- 9. 19(土) 各測量調査を実施。
- 9. 20(日) T1の掘削を開始。部分的にⅢ層(中世盛土層)を検出。各測量調査を継続。
- 9. 21(月) 現地説明会を開催。T1の掘り下げ、部分的にⅣ層(地山)を検出。各測量調査を継続。
- 9. 22(火) T1の完掘、完掘写真撮影。各測量調査終了。曲輪測量は完了。等高線測量は詰ノ段の六割程度ま

でを完了。器材等大部分を撤収。

9. 23 (水) T1の土層断面図, 平面図を作成。埋め戻し。撤収。

第2次調査は2016年9月15日～25日に実施した。第1次調査にひき続き, 詰ノ段に対する測量調査と発掘調査を実施した。調査は測量A班(等高線測量), 測量B班(詰ノ段下端線測量), 発掘班の3班体制で実施した。経過は以下の通りである。

9. 15 (木) 現場設営。発掘班はT2・T4(未実施)を設置。測量A班はTB1・TB2をもとにグリッドを復元。測量B班は詰ノ段下端まわりに測量杭を設置。

9. 16 (金) 発掘班はT2の掘削を開始, 表土を除去。T3の設置。測量A班はグリッド復元を継続。測量B班は測量杭を設置・補正。

9. 17 (土) 発掘班はT2の掘削, II層を検出。測量A班はグリッド復元完了, レベリンを開始。測量B班は北部の平板測量を実施。

9. 18 (日) 豪雨につき発掘班は作業中止。測量A班は測量を継続, 東部を完了。測量B班は東部の平板測量を実施。

9. 19 (月) 雨天につき発掘班は作業休止。測量A班は測量を継続。測量B班は北西部の平板測量を実施。

9. 20 (火) 台風の予報により午前中は全体作業休止。午後は現地の養生, 図面整理, 遺物洗浄。

9. 21 (水) 発掘班はT2の掘削, 一部で地山を検出。T3の掘削開始, 炭化物層を検出。測量A班はレベリングを継続。測量B班は西南部の平板測量を実施。

9. 22 (木) 発掘班はT2・T3の掘削。T2はII層掘削途中。T3は部分的に地山検出。測量A班はほぼ全域のレベリングを完了。測量B班は東部(虎口空間)の測量を実施。

9. 23 (金) 発掘班はT2・T3の掘削。T2は地山まで掘削しSD2を確認。T3は炭化物層を除去。測量A班は全域のレベリングを完了。測量B班は北東部・西南部の登り口を平板測量。

9. 24 (土) 現地説明会を開催。発掘班はT2・T3の掘削。T2はSD2を完掘。T3は完掘。測量A班は虎口空間の測量。測量B班は詰ノ段のエレベーションを測量。

9. 25 (日) T2・T3の完掘。完掘写真を撮影。T2・T3の土層断面図・平面図を作成。埋め戻し。撤収。

第Ⅱ章 測量調査

第1節 地形測量

朝倉城跡については幾つかの縄張り図が作成されたのみで未だ正確な測量図が作成されていない。朝倉城跡の構造把握と現状記録のためには地形や土塁等構造物の測量が不可欠であり、調査の主要課題と位置づけ実施した。まずは詰ノ段から着手し、順次周辺に範囲を拡張する方針で開始した。

(1) 地形測量

地形測量は詰ノ段を対象に等高線図作成のための測量調査を実施した。平坦に加工された曲輪であるため、目視での正確な地形把握が困難であり、1mメッシュの交差点標高を計測し、現地での観察記録と照合しながら図上で等高線を復元する方法をとった。地形測量の基準となるグリッドは、委託により設置した2つの測量杭(TB1・TB2)のうち、詰ノ段中央付近に設置したTB1を交差点のひとつ(E8)として4m間隔で設定した(第3図)。TB1の座標値は $X=60918.149m$ 、 $Y=-1839.616m$ 、標高は101.977mである。グリッドの方位は世界測地系の座標軸に沿っている。

2015年度の調査では、まずトータルステーションによるグリッド設定の作業より始め、グリッド設置後はグリッドライン上の1mごとの標高を計測した。機材操作等に手間取ったこともあり2015年度の地形測量調査は5～10ライン範囲に止まった。

2016年度の調査では、前年度に取り残した範囲を対象に詰ノ段全域の測量図完成を目指した。数字の読み違い等のトラブルはあったが無事全範囲の測量を終えた。当初予定していた詰ノ段のエレベーション図は6ラインの一本のみに終わり、次年度以降に課題を残した。

(2) 詰ノ段の測量

曲輪の構造および遺存状況を記録するために、土塁・虎口等施設物の平面位置を測量した。

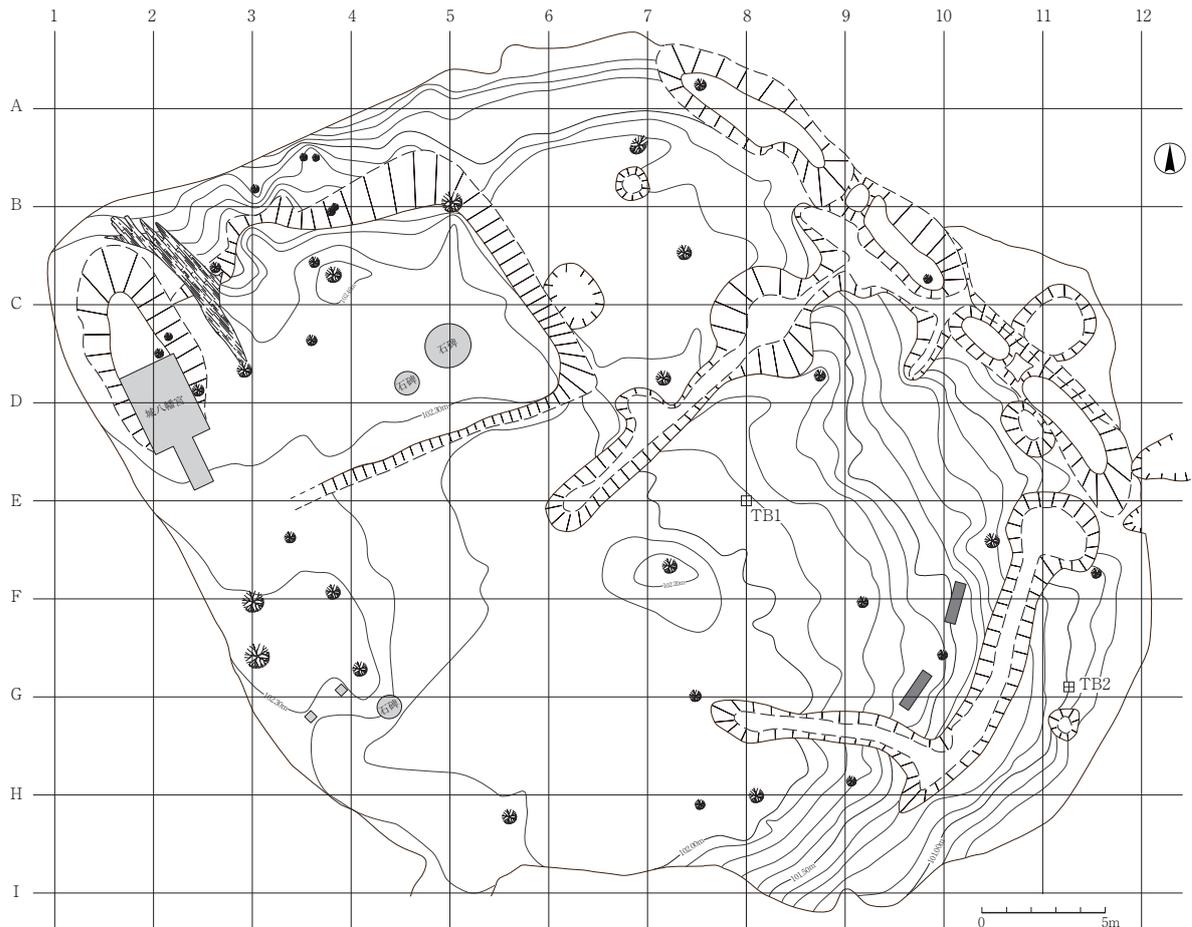
2015年度はトータルステーションを用い、詰ノ段上の土塁、溝、段差など後世の掘削如何を問わず100分の1の縮尺で現状を測量し、詰ノ段上部全域の記録を終えた。

2016年度は詰ノ段下端線の測量を実施した。詰ノ段を取り囲む杭(21箇所)を詰ノ段上部からトータルステーションで視準して設置し、平板測量を100分の1の縮尺でおこなった。なお、詰ノ段東に構築されたテラス状の虎口空間については、より詳細な地形図が必要と考え測量図を20分の1縮尺で作成した。

第2節 施設物等の測量

(1) 地形の特徴

詰ノ段は自然地形の峰(尾根)の斜面を切岸により急斜面とした裁頭方錐形の形状をとる。上面と下端の比高差は約4mで土塁を加えれば更に急峻である。約20mの距離をおく西ノ段との間の断絶が人工的な掘削(堀切)によるのかは今後の検討課題である。土塁を除くと、詰ノ段上面における等高線の最高位は102.40m、最低位は100.80mでありおよそ1.6mの比高差がある。全体としては西側が高く東側が低い。東3分の1区域はとくに等高線の間隔が狭く傾斜している。北西区域の台状部は東の段差が60～80cmであるのに対して、南の段差は20cm程度である。本来の地形は西高東低と考えられ、高所が突如として急崖となる西端は人為的な加工された形状とも考えられる。南西区域の等高線102.00m～102.10mの範囲がもっとも広い平坦地であるが、発掘調査では(T3、後述)包含層がほとんど認められず本来の地形を把握するのが困難である。



第3図 グリッド配置図

(2) 詰ノ段の構成・現状

第1・2次調査の測量成果によれば、詰ノ段上面の形状は五角形に近い不整形である。ほぼ直角に接する北辺と西辺は直線的で、土塁がよく遺存する北東辺も直線的である。短い南辺も直線傾向であるが、南東部分は弓形に張り出しており他箇所と異なる。すなわち二の段に面する箇所が弧線、他箇所が直線と区分できる。土塁は城八幡宮が置かれた北西部(城八幡土塁)と北東部(北東土塁)に遺存する。城八幡土塁は長さ8m、北東土塁は断続的に26mが遺存する。高さはそれぞれ約60cm、約21～72cmである。北東土塁は中間付近に切れ目があり、切れ目部分が虎口と思われる。虎口下には平面が略三角形のテラスがある。テラスは詰ノ段と二ノ段の中間位置にあり、三角形の平面規模は底辺10m、高さ3mである。中央の280cm範囲が隅丸方形に凹んでいる。虎口空間と想定しており今後発掘調査を実施し内容を検討する計画である。北東土塁は北半部の残りがよく高さ80cmが遺存するが、南半部は僅かな痕跡が確認されるにとどまる。

城八幡土塁の東側は長さ13m、幅9mの長方形範囲が周囲よりやや高く台状を呈する。これを台状部と呼ぶ。台状部と下部の段差は東側が60～80cm、南側が20cmである。北辺の中央付近は幅2m、長さ1.6m程度に張り出した箇所がみられる。人工的な地形の改変とみられるが、土塁の有無と合わせて発掘調査による検討が必要である。台状部東下の凹みや、中央と南東辺にみられる溝状の凹みは、聞き取りによれば戦後の耕作にともない掘削されたものという。

虎口から降り口がのびる北東斜面には下位に2m大の腰曲輪が確認できる。その他は傾斜約40度の切岸となっている。また聞き取りにより詰ノ段の南斜面に防空壕があることを確認した。

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 発掘調査の経過と内容

(1) 発掘調査の内容

第1・2次調査では3つの調査坑(T1・T2・T3)を設定し計15㎡(各8㎡,4㎡,1㎡)について発掘調査を実施した(第4図)。2015年度の第1次調査ではT1を調査した。第1次調査では当初,台状部の上下段,土塁,南区域の全域の8箇所について調査を実施する予定であったが,現状変更許可の遅れなどもあり台状部の上下を対象としたT1のみの調査にとどまった。2016年度の第2次調査では当初,台状部の上下,南区域,土塁,虎口空間の4箇所について調査を実施する予定であったが天候不順の影響もあり,台状部の上下(T2)と南区域(T3)の2箇所を調査するにとどまった。

① T1の調査

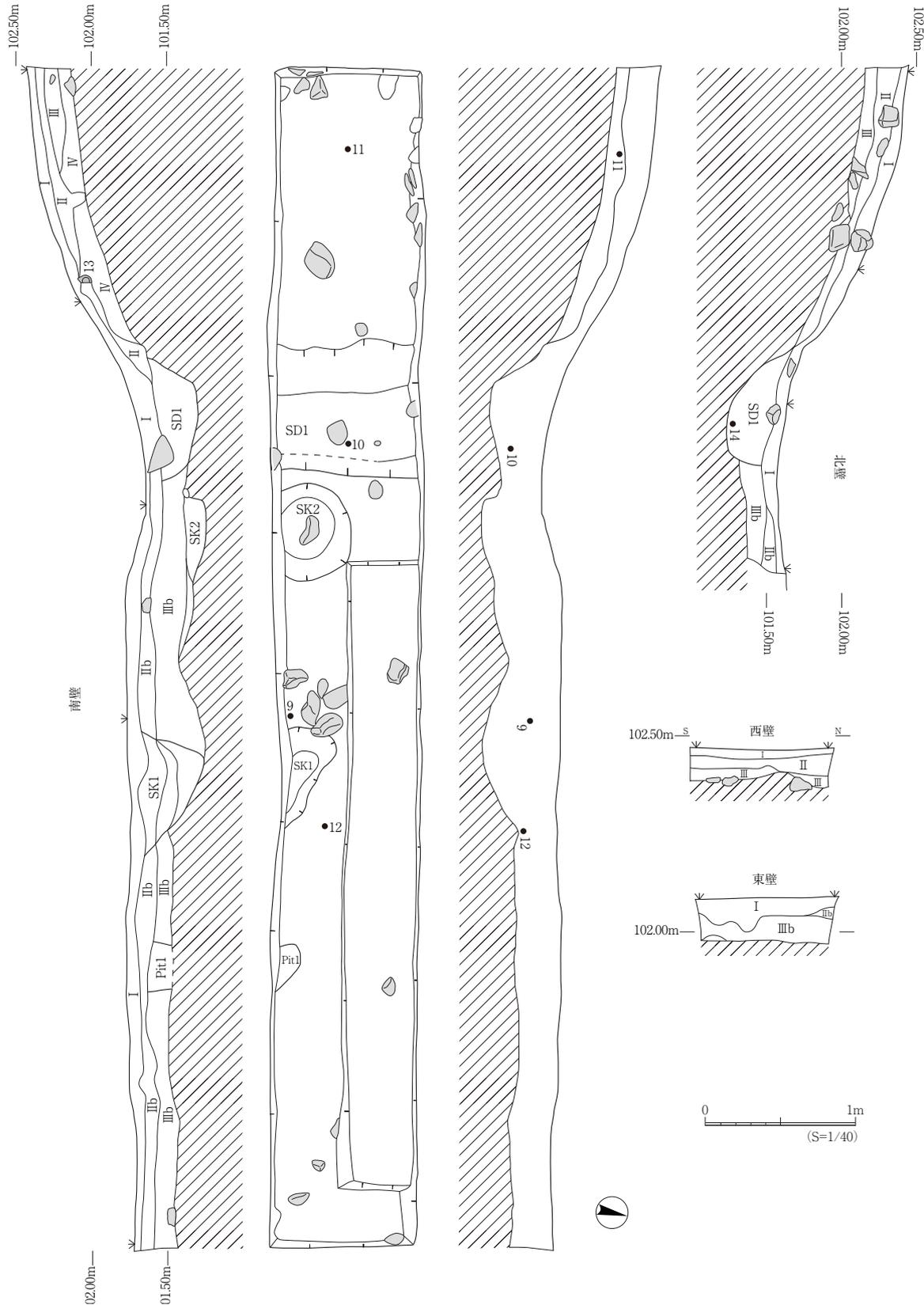
T1は詰ノ段北西区域の台状部の東辺中央付近に設定した,東西に長い幅1m,長さ8mの調査坑である。台状部上面から下部の平場にまたがっており,台状部造成方法の確認を意図した。

掘削は調査坑の西端より開始した。上部側の西端では薄い表土直下に暗褐色土層(Ⅱ層)があり20cm大の塊石が疎らに出土した。中世の構築物である可能性を考慮し写真等で位置を記録したが,塊石を含む暗褐色土層からは近現代のガラス片他が出土したため,塊石は原位置でないと判断し慎重に除去しながら掘削を進めた。暗褐色土を除去すると,下部に山土を主体とする黄褐色土層(Ⅲ層)



第4図 調査坑の位置

を検出した。台状部の上面範囲の全体で黄褐色土層を露出させた後、南側半部にサブトレンチを設置し掘削を進めると10cm程度で地山(山土層・Ⅳ層)に達した。黄褐色土層中からは青磁片・白磁片の出土があり中世の包含層と認めた。黄褐色土層中にも上部層と同様の塊石を確認したが、疎らで配置に規則性は認められなかった。遺構の有無に留意しつつ台状部上面から斜面にかけての範囲で地



第5図 T1平面図・断面図

山を露出させた。

やや遅れて東端の掘削を開始した。東端の40cm幅で層位を確認したところ、西端と同様に暗褐色土層、黄褐色土層、地山という層序が確認できた。作業日程を勘案して下部平場については調査対象を南長壁沿い幅50cmのサブトレンチとして掘削を進めた。遺構・遺物に注意しながら掘削を進め、下部平場においても地山を露出させた。

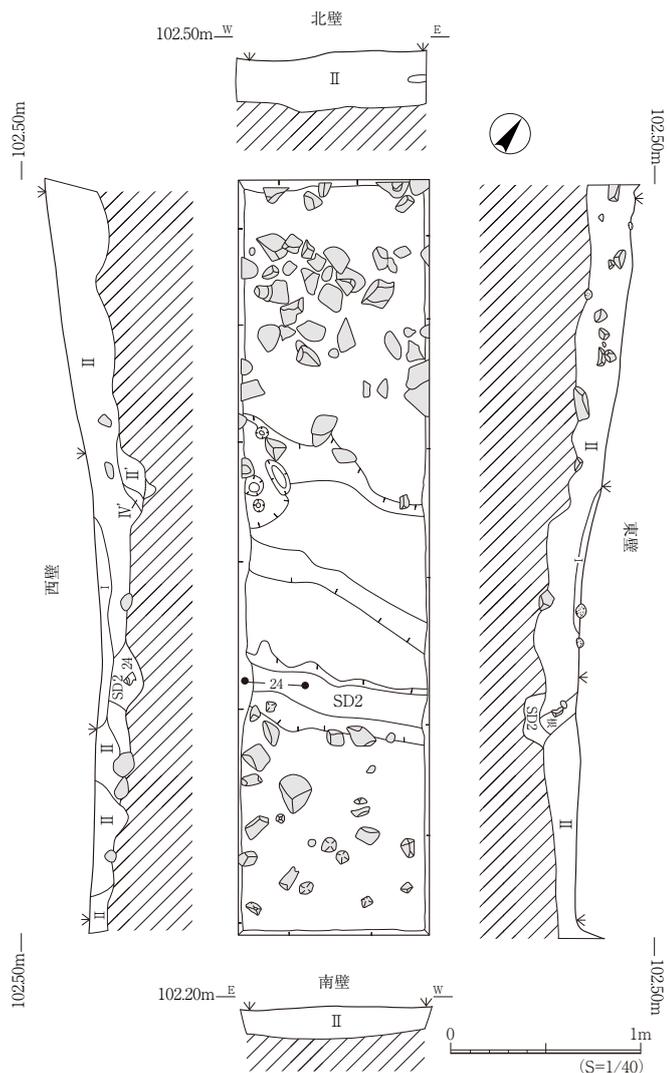
下部平場の中央付近では地山面で割石の集中箇所および遺構のプランを確認した。20cm大の角の取れた長細い塊石が50cm範囲に集中していたが掘方は認められなかった。塊石群のそばの遺構(SK1)については露出範囲について完掘し、南壁で土層断面を確認した。

台状部の縁辺下端は縁辺に沿ってやや深く落ち込んでおり溝の可能性を考慮し掘削を進めた。台状部の下位縁辺から150cmの範囲についてサブトレンチの北側50cm部分も掘削した結果、台状部の縁辺に沿って幅80cmの溝がめぐると分かりこれをSD1とした。床面を清掃する過程で、SD1の東隣りの60cm範囲が凹むことが分かり精査した結果、掘方をもつ土坑であると判断されたためこれをSK2とした。各遺構の内容については後述する。

T1からは細かな破片などを含め231点の遺物が出土した。黄褐色土層(Ⅲ層)を中心に12点の遺物については位置を記録し収拾した。暗褐色土層(Ⅱ層)や小片は層位別に収拾した。七割近くが土器で、他はガラス瓶が多く、青磁や白磁は少量にとどまる。貿易陶磁には5点がある。遺物に詳細については後述する。

② T2の調査

T2は台状部の南辺中央付近に設定した、南北に長い幅1m、長さ4mの調査坑である。台状部の形状およびT1で確認した台状部縁辺の溝(SD1)の延長を確認すべく設定した。北端の上部と南端の下部から同時に掘削を開始した。いずれも厚さ5cmほどの表土を除去すると炭化物を含む黄褐色土層が露出した。黄褐色土層中からは近代以降の磁器やガラス片が出土しており(Pl.6-③)、やや色調に違いはあるがT1で確認した暗褐色土層(Ⅱ層)に類する土層と判断した。全面の表土を除去して黄褐色土層を露出させたあと、降雨により長く作業を中断した。再開後は東壁沿いに幅20cmのサブトレンチを設定し、(斜面部を残して)掘削を進めた。上部では20cm程度、下部では10cm程度で地山が露出し、近現代の黄褐色土層が地山直上にあり、T1で確認したⅢ層(中世層)の不在を認めた。黄褐色土層中からは20cm大の塊石が集中して出土し、一部は地山に沈み込んでいた。斜面部をふく



第6図 T2平面図・断面図

めサブトレンチ内の全面で地山を露出させ、全体の層序が黄褐色土層(Ⅱ層)→地山であることを確認した後、T2全面を(塊石を残して)地山まで掘削した。

溝の存在が予想された縁辺部を慎重に掘り下げたところ、溝状のプランを2条確認した(P16-⑦)。まず北側(上部側)について東側半部の覆土を除去し掘方を確認したところ、浅い溝のように見える箇所もあるが、斜面縁辺を切り土した痕跡であると判断した。

下部の溝状プランも同じように東側半部の覆土を除去した結果、深くはないが明確な掘方をもつ溝であることを確認しSD2とした。T1で確認したSD1の延長と考えたが、出土遺物は近代以降のものであった。

塊石を図化したのち除去しT2全面の地山を露出させた。検出遺構はSD2のみであった。

T2からは76点の遺物が出土した。4点については位置を記録し収拾した。中世の土器や中国製の白磁なども少量あるが、大部分は白磁・ガラス・BB弾・アルミ製品など近現代の製品であった(第8図15~19)。

③ T3の調査

T3は詰ノ段南西区域のひろい平坦部の中央付近に設置した1×1mの調査坑である。南辺がGライン、西辺が6ラインから1m東の位置にある。T1で確認したⅢ層(中世層)の存在を前提に文化層の遺存状況を確認すべく設定した。除草程度の掘削で表土層を除去すると、T3の広い範囲が炭化物層に覆われる状況であった。検出レベルでビニール等が出土しており炭化物層が現代層であることを認めた(P19-⑥)。西壁沿いに幅30cmのサブトレンチを設置し炭化物層を除去したところ僅か10cm程度で地山に達した。全面で炭化物層を除去すると20cm大の塊石が地山にめり込むような状況で疎らに出土した。塊石が露出するレベルまで地山を掘り下げたところで完掘とした。

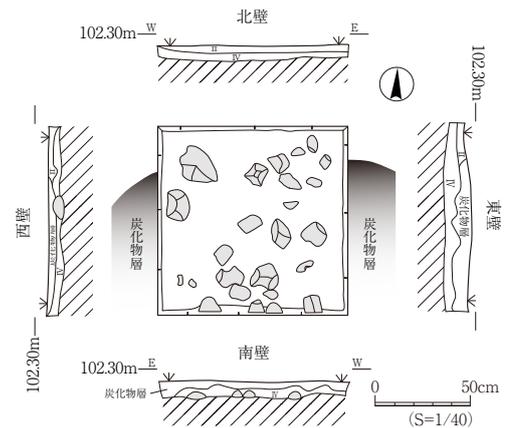
T3では炭化物層の及ばない北側に堆積する近現代の遺物を含む暗褐色層はT1・T2と共通する土層である。T3の層序はT2と同じように地山上に暗褐色土(Ⅱ層)があるが堆積層は極めて薄い。炭化物層は暗褐色土層を削るように堆積していた。

T3からは40点の遺物等が出土した。中世の土器や貿易陶磁などは出土していない。炭化物層から出土した遺物は被熱の痕跡が顕著である(P111)。地元の方の話によれば、かつて詰ノ段では城八幡宮の氏子の集まりがあり、その際には焚き火を行うことがあったという。資料の出土・被熱状況はあたかも焚き火に投棄されたゴミのようである。出土遺物のうち果物フォークや洋釘、鉄ボルトを図示した(第8図25~28)。ビニール製品には「あんぱん」「¥15」の文字などが確認でき、またアルミのチューブ製品はT2の第I層で収拾した「ソフトチョコレート□」と記されたチューブ(第8図18)の類品である。発泡トレーも食品の包装物であろうから、集会時の飲み食いででたゴミを焚き火に投棄したものであろうか。

(2) 基本層序

詰ノ段の地形は西高東低であり、大きく見ると3つの調査坑はT2・T3が高所側、T1が高所から中位にかかる箇所となる。これら位置とも関わり、T1の堆積が相対的に厚く良好である。3箇所の層位には対応関係が認められるので、まずT1の層序を確認する。

T1では第1~4層を確認した。それぞれを基本層序Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層とする。第Ⅱ・Ⅲ層について



第7図 T3平面図・断面図

は水平位置の違いにより西側の上部を a 層, 東側の下部を b 層とし位置により区分した。第 I 層は草が生い茂る表土層で厚さは 8cm 程度である。除草 = 表土除去となる。第 II 層は近代層にあたる暗褐色土層である。厚さは 10 ~ 15cm で少量の小石を含む。20cm 大の塊石も多くは II 層中にあった。II b 層には炭化物が含まれる。第 III 層は中世の遺物を含む盛土層である。山土を主体とした暗黄褐色土層で地山の再堆積層とみられる。締まりがあり粘性が高い。炭化物を含む。炭化物は部分的に集中する。厚さは約 10cm である。斜面部には第 III 層の堆積がない。第 IV 層は風化岩盤層の地山である。チャートに起源した黄褐色を基調とし各所に赤や黒が粒状に混じる。上部では地表下 20cm, 下部では地表下 30cm で第 IV 層に達する。

T2 では表土下に, II 層と IV 層を確認した。T1 の II 層よりみ黄みがかかった色調である。粘性が弱く, 1cm 以下の炭化物を含む。III 層は認められず, 上部では地表下 20 数cm, 下部では地表下 10 数cm で地山の IV 層に達する。

T3 では表土下に炭化物層, II 層, IV 層を確認した。地山である IV 層の上に厚さ 10cm 程度の II 層が堆積し, II 層を削り取るように上部に炭化物層が堆積していた。II 層は粘りがありやや粗く, 1cm 以下の炭化物を含む。

第 2 節 検出遺構

遺構番号は遺跡全体を通じての連番とする。第 1・2 次調査で確認した遺構は溝状遺構 (SD) 2 条, 土坑 (SK) 2 基, ピット (Pit) 1 基である。

(1) SD1 (第 6 図, Pl.4-⑦⑧)

T1 の台状部の縁辺で, 縁辺に沿って延びる溝状遺構を確認した。(基本層序の) 第 II 層に覆われており, 中世の盛土である第 III 層を掘削し構築された。幅 80cm, 深さ 30cm で長さは T1 の幅である 1m までを確認した。断面は歪な弓形であるが, 南壁によれば本来の断面形は隅丸逆台形であった可能性もある。覆土は単層で, III 層が再堆積したようなブロック状の土層であり, 炭化物が含まれる。覆土中から中国製の白磁片 (第 8 図 10) と鉄片 (第 8 図 14) が出土した。白磁片は端反口の皿であり, 小野編年 (1982) では 15 世紀後半 ~ 16 世紀前半の製作年代が想定されている。

(2) SK1 (第 6 図, Pl.4-⑤)

T1 中央付近の南壁際に位置する土坑である。確認できたのは遺構の北側部分で南方向にさらに広がる。遺構は第 I 層に覆われており, 第 II 層を掘削し構築された。T1 内については完掘し, 南壁で土層断面を確認した。平面形は楕円形とみられるが, 溝の可能性もある。幅 80cm, 確認した長さ 40cm, 確認面からの深さは 40cm である。覆土は 3 層に分かれる。上層はブロック状の山土を主体とした土層で粘性がある。中層はやや黄みがかかった暗褐色土層でやや締まりがない。下層は暗褐色土と山土の混合土層で 5cm 大の礫を含む。覆土中から土器片 1 点が出土した。小片につき時期等は不明である。II 層を切る近現代の遺構である

(3) SK2 (第 6 図, Pl.4-⑥⑦)

T1 の中央付近, SD1 の東隣りに位置する土坑である。地山を精査する過程で浅い掘方を検出した。円形もしくは隅丸方形の土坑とみられる。上部を III 層に覆われており, 構築面は IV 層 (地山) である。平面は 65cm 大で, 深さは 15cm である。覆土は地山によく似ているがやや黒ずんだ色調で, 締まりがあって粘性も強い。中央底に 20cm 大の河原石がある。遺物は出土していない。

(4) Pit1 (第 6 図, Pl.6-③)

T1 のやや東寄りに位置するピットである。層中では検出できなかったが, 南壁の土層断面で存在

を確認しⅣ層で平面プランを検出した。南壁の土層断面によればⅡ層に覆われて、第Ⅲ層を掘削し構築された。平面形は明確でないが、楕円形か隅丸方形とみられる。幅34cm、深さ16cmまでを確認した。確認部分の覆土は山土主体の単層で、粘性が強く少量の暗褐色土粒や礫が混じる。遺物は出土していない。

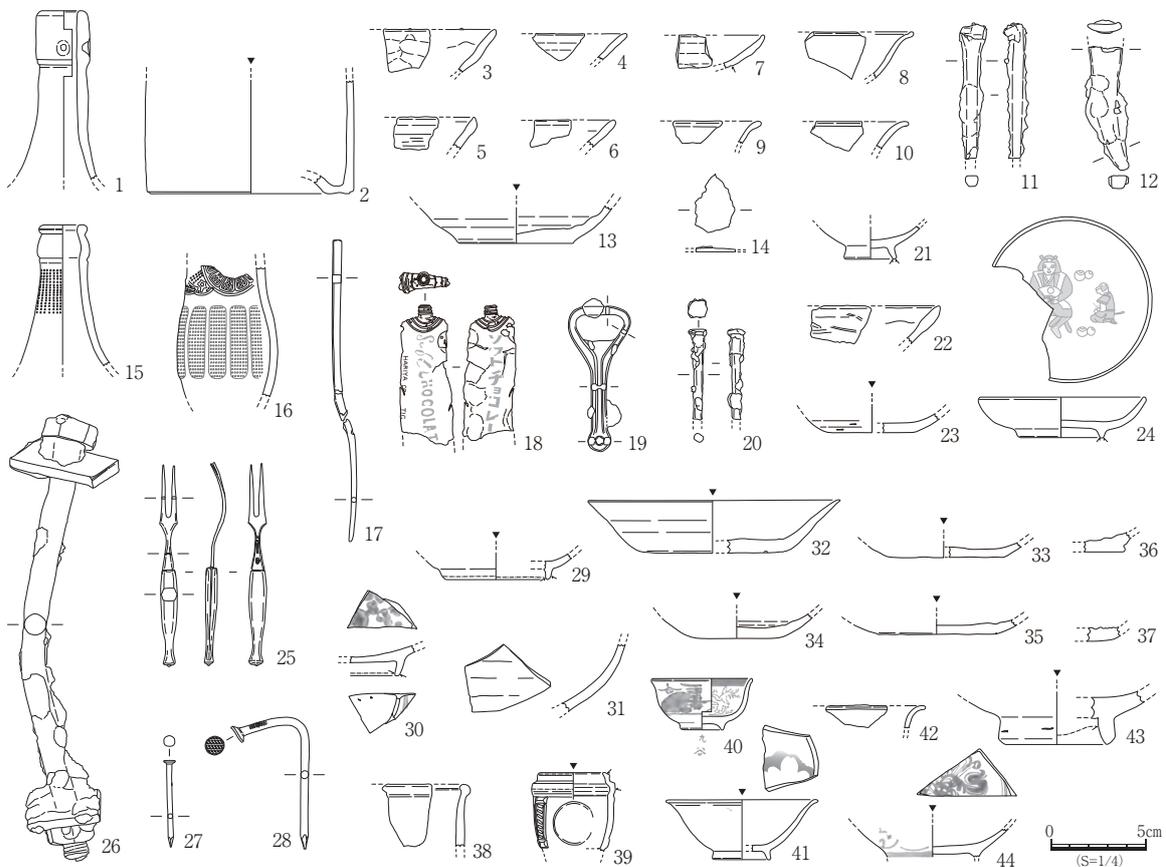
(5) SD2 (第7図, Pl.7-①~④)

T2の中央やや南寄りに位置する溝状遺構である。台状部の縁辺から南120cmに位置する。幅30cm、深さ15cmで、長さはT2幅の1mまでを確認した。断面は東壁断面によれば隅丸逆台形である。覆土はⅡ層とよく似た鈍い黄褐色土層で1cm以下の炭化物を含み、Ⅱ層に比べると締まりが弱い。Ⅱ層に切られる、または覆われる。覆土から上絵付の白磁皿(第8図24)と鉄針金(Pl.11)が出土した。白磁皿は中央付近と西壁で出土した破片が接合した。白磁皿は近代以降の製品である。

第3節 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

第1・2次調査における出土遺物は近現代の製品までを含めると、表採も合わせて418点である。現在のところ、明確に中世前半や古代以前に遡る資料は出土していない。418点のうち、中世・朝倉城跡と関連する戦国時代(15世紀後半~16世紀末)の資料として検討しうるのは214点である。T1が144点、T2が8点、詰ノ段斜面が56点、表採が5点である。T1からの出土が顕著で、内訳をみるとⅠ層8点、Ⅱ層74点、Ⅲ層(遺構を含む)が21点である。Ⅱ・Ⅲ層の遺物は大部分が下部のⅡb・Ⅲb層である。T3に中世の遺物がなく、T2が僅少であることと併せてみると、Ⅲ層に多くの遺物が含まれていた



第8図 朝倉城跡第1・2次調査出土遺物

(1~13. T1出土遺物, 14. SD1出土遺物, 15~24. T2出土遺物, 25~28. T3出土遺物, 29~37. 詰ノ段北斜面出土遺物, 38~44. 表面採集遺物/7~10・29・42. 中国製白磁, 43. 中国製青磁, 30・44. 青花, 3~6・13・22・23・32~37. 中世土器)

といえる。中世遺物の種別内訳は土器192点、白磁9点、青磁2点、青花2点、鉄器等7点である。以下、中世遺物について種別の詳細を記す。

(2) 土器

土器は192点が出土した。細片が多く時期の特定は困難であるが、胎土や焼成、色調などにより中世製品の可能性を考慮した。器種が窺えるものはすべて坏皿である。箇所別では、T1が133点、T2が6点、詰ノ段斜面から50点、表採3点である。T1ではⅡ層から多く出土するがⅢ層の遺物が混入したと考えられる。出土遺物のうち13点を図示した(第8図)。全形が窺えるのは32で器高2.8cm、口径10.3cm、底径7.4cmである。直線的に外傾する器体は中位がやや強いナデにより小さく外折する。口唇部は尖り気味である。32を他の底部を比較すると、33・34・35は隅丸状に立ちあがる形状で32に類似する。23は器形が32と似るが、外面裾にケズリがあって稜がたつ。胎土は精良で白く器壁も薄い。37は丸味をもって立ちあがるが内面に強いロクロ目が残る。13は外面裾がナデにより薄い円盤状となる器形で32とは異なる。36も底部が薄い円盤状であり裾に沈線がめぐり。口縁部をみると、4・6は一定の厚みをもって口唇が丸く収まる目立った特徴のない形態であるが、5・22は口縁が肥厚し32と比べても特徴的である。22が内外ともに肥厚するのに対して、5は外面のみ肥厚し平坦な内口縁とに挟まれた口唇部は尖り気味である。3は外面に強いナデがあり手づくねの可能性はある。

内面に強いロクロ目が残る37については岡豊城跡出土の坏皿と類比でき、16世紀後半にくだる可能性が指摘できるが、土佐における坏皿形土器は分類体系が整っておらず今後の課題となっている。32は15世紀後葉～16世紀初頭に比定される田村遺跡(城館) Loc.42 SK96(高知県教育委員会 1986)の一括遺物や天神溝田遺跡(高知県埋蔵文化財センター 2014)の埋納遺構の一括遺物から扁平化が進行した器形と考えることができ、弘人屋敷跡(高知県埋蔵文化財センター 2014)のSK155(円形木棺墓)出土坏皿(260)に近い。16世紀前半の資料となるであろうか。一方で13は天神溝田の異質な1点(446)に通じるところがあり、32より遡るであろうか。いまだ手掛かりが少ないが、朝倉城跡から最も多く出土する資料であるから分類・編年の整備が求められる。

(3) 貿易陶磁

中国製の白磁、青磁、青花が少量出土した。

白磁は9点が出土した。いずれも皿の破片とみられる。口縁部の5点と高台部の1点を図示した(第8図7～10・29・42)。うちT1が7点、T2が1点、詰ノ段斜面が1点である。T1はⅠ層が1点、Ⅱ層が2点、Ⅲb層が3点、SD1が1点である。T2はⅡ層からの出土である。図示したうち、7は小野分類の白磁皿B群で15世紀前半に年代が中心がある。8・9・10・42は端反口の白磁皿C群で15世紀後半から16世紀前半の年代が当てられる。29は畳付釉剥ぎの高台部破片で白磁皿C群と考えられる。7・8・9がⅢb層、10が(Ⅲb層を掘削し構築された)SD1から出土し、29は詰ノ段北斜面の採集資料、42は表面採取資料である。

青磁は2点が出土した。1点はT1のⅢa層(Pl4-③)、1点は城山公民館付近の表採である(43)。T1の1点はやや厚みのある破片で盤の可能性はある。43は碗の高台破片である。厚みがあり、器体から高台内中位まで施釉されている。上田編年(1982)によれば15世紀後半～16世紀前半に比定しうる。

青花は2点が出土した。2点とも皿の底部・高台とみられる。1点は詰ノ段斜面採集資料(30)、1点は表土採集資料(44)である。30は底部・高台である。畳付釉剥ぎで高台脇に二重圏線、見込に花文が描かれる。高台がやや高い。あるいは青花皿E群であろうか。44は畳付部分が欠損した破片である。胴部外面に唐草文、見込は二重圏線内に玉取獅子が描かれる。高台脇に二重圏線がめぐり。小野分類の青花皿B1群で15世紀後半～16世紀前半の指標となる。

(4) 鉄器

鉄製品が5点、鉄滓が2点出土した。鉄製品はT1から4点、T2から1点出土し、鉄滓は詰ノ段斜面で採集した。いずれも正確な時期は不詳である。鉄製品は釘が3点、刀子(刃物)柄が1点、不詳の破片が1点である。釘は11が折釘でT1のⅢa層から出土した。身の断面方形の鍛造品である。20は頭部が薄い方形で頭巻釘の可能性はある。身の断面が方形の鍛造品である。T2のⅡa層から出土した。刀子(刃物)柄の12はT1のⅢb層から出土した。柄先端が撓んだ形状である。14は詳細不明の薄い鉄片である。SD1北壁土層断面の覆土最下層から出土した。

鉄滓の2点は詰ノ段北斜面で採集した。いずれも10cm大の塊である(Pl.12)。Pl.12の左側は碗状に凹んだ形状であり、鍛冶関連資料の可能性を認めて写真のみを掲載した。

第4節 遺構と遺物についてのまとめ

第1・2次調査の遺構と遺物について整理しておく。

T1では①IV層(地山)を掘削し構築されたSK2、②SK2を覆う第Ⅲ層の造成、③第Ⅲ層を掘削し構築されたSD1、という3つの段階を中世の活動痕跡として確認した。②と③は一連の作為とも考えられる。T2やT3ではIV層面に遺構がなくⅢ層が認められないため比較が困難である。

出土遺物の年代についても整理しておく。

貿易陶磁は、白磁皿B群(7)の1点が15世紀前半というやや早い時期を示すが、多くは白磁皿C群(8・9・10・29・42)、青磁碗(43)、青花皿B1群(44)など15世紀後半から16世紀前半の年代を示す。一方で土器(坏皿)は、分類・編年が整っておらず不確実ではあるが、内面に強いロクロ目が残る37があるいは16世紀後半ともされるが、他の資料は田村遺跡Loc.42 SK96や天神溝田遺跡埋納遺構との対比により16世紀前半の年代が考慮される。

遺構の3段階と出土遺物を対照すると、②の第Ⅲ層には7・9の白磁があり、③のSD1には10の白磁がある。僅かな資料ではあるが時期差は見られない。①のSK2には出土遺物がないため年代不詳である。7の白磁の本来の時期が①の段階であるか、第3次以降の調査で確認したい。

表1 出土遺物観察表

No.	出土位置	素材区分 器種:部位等	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	①色調・釉薬 ②素材 ③装飾 ④造形 ⑤使用痕 ⑥その他	産地 時期
1	T1 表土層	ガラス 瓶:口頸	9.0+	—	—	①透明、緑がかる。②透明ガラス。④瓶口に段、側面に機械栓凹み一対。	近現代。
2	T1 表土層	ガラス 瓶:底部	6.0+	11.0▼	11.0▼	①透明、緑がかる。②透明ガラス。④上げ底。裾に小段。	近現代。
3	T1 表土	土器 坏皿:口縁	2.3+	—	—	①橙。②小砂粒。④手捏ね。外胴ナデオサエ。内胴ナデ凹み。	在地。 15~16c.
4	T1 表土層	土器 坏皿:口縁	1.4+	—	—	①鈍黄橙。②精選土、微砂粒。④内外精ナデ。	在地産。
5	T1 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	1.9+	—	—	①灰褐。②角岩粒。④口唇尖り気味。内外ナデ、外胴板ナデ。	
6	T1 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	1.5+	—	—	①鈍橙。②精選土。④内外回転ナデ。	在地産。
7	T1 Ⅲb層	白磁 皿:口縁	1.8+	—	—	①高台周りに無釉。⑥小野白磁皿B群。T1-No.9.	中国。 15c.
8	T1 一括	白磁 皿:口縁	2.5+	—	—	④口縁端反り。⑥小野白磁皿C群。	中国。 16c.
9	T1 Ⅲb層	白磁 皿:口縁	1.2+	—	—	④端反り。⑥小野白磁皿C群。T1-No.6.	中国。 16c.
10	T1:SD1 覆土	白磁 皿カ:口縁	1.5+	—	—	④端反り。⑥小野白磁皿C群。T1-No.8.	中国。 16c.
11	T1 Ⅲa層	鉄器 折釘	長さ 7.1+	幅 0.6	厚さ 0.5	④断面方形。⑥T1-No.3.	中世カ。

No.	出土位置	素材区分 器種・部位等	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	①色調・釉薬 ②素材 ③装飾 ④造形 ⑤使用痕 ⑥その他	産地 時期
12	T1 Ⅲb層	鉄器 刀子：柄カ	長さ 6.5+	幅 1.8+	厚さ 6.5 ³ 、	④刃部?断面弓形。柄部断面方形。⑥T1-No.7	
13	T1 Ⅳ層直上	土器 坏皿：胴～底	1.9+	—	6.0	①鈍黄橙。②角岩微粒。④轆轤成形。回転糸切。外胴回転ナデ。内面回転ナデ轆轤目残る。⑥T1-No.10.	在地産。 16c前カ
14	T1:SD1 最下層	鉄片	長さ 3.0+	幅 2.1+	厚さ 2.0 ³ 、	⑥片面に木質遺存。縦方向。T1-No.11.	
15	T2 Ⅱa層	ガラス 瓶：口頸	7.4+	—	—	①無色透明。③頸に粒文。④側面に范線。	近現代。
16	T2 表土	ガラス 瓶：胴	7.0+	5.3▼	—	①無色透明。③外胴上位に花卉ロゴ。中位に縦隅丸長方形粒充填文並ぶ。	近現代。
17	T2 Ⅱa層	アルミ 箸	16.0	幅 0.5	厚さ 0.4	①銀。②アルミカ。④断面方形。先端側は断面円形。	近現代。
18	T2 表土	アルミ チューブ	6.7+	2.6	1.0	①白。②アルミ。③一面に「ソフトチョコレート」, 商標。一面に「SoftCHOCOTA」, 「HARIYA C—TIC—」	近現代。
19	T2 Ⅱa層	鉄製品 栓抜き	長さ 7.6	幅 3.4	厚さ 0.4	④鍛造。柄両面中央に樋。柄端に孔。断面に范ズレ。	近現代。
20	T2 Ⅱa層	鉄製品 頭巻釘カ	長さ 4.8+	幅 0.5	厚さ 0.4	④鍛造。断面方形。	中近世。
21	T2 表土	白磁 小坏：胴～底	1.7+	—	2.8	①畳付釉剥。④ハの字高台。	近現代。
22	T2 Ⅱa層	土器 坏皿：口縁	2.0+	—	—	①鈍黄橙。②精選土。微砂粒。④口縁やや肥厚。口唇尖る。内外ナデ。外口縁にヘラ痕。	在地。
23	T2 Ⅱa層	土器 坏皿：底	1.0+	—	4.5▼	①灰白。②精選土。微砂粒。④精品。内面精ナデ。外面ケズリ。	
24	T2:SD2 覆土	白磁 上絵付皿	2.2	8.8	4.6	①畳付釉剥。③見込に女。犬。鞠。④型作りカ。⑥T2-No.4.	近現代。
25	T3 炭化物層	ステンレス 果物フォーク	長さ 10.8	幅 1.0	厚さ 0.7	①柄は白色。②フォークはステンレス。柄はプラスチック。③フォーク背面に「IS STAINLESS」, 「商標」④二又。柄は側面に范線。	近現代。
26	T3 炭化物層	鉄製品 ボルト	長さ 23.6+	幅 1.1	厚さ 1.1	②鉄。④六角ボルト捻子は頭部径3.0cm。円筒部径1.1cm。座金4.5cm四方5mm厚。ナットは径2.5cm。座金4.0cm四方5mm厚。	近現代。
27	T3 Ⅳ層	鉄製品 洋釘	4.5	0.5	0.2	④平頭。胴断面円形。	近現代。
28	T3 炭化物層	鉄製品 洋釘	長さ 10.0	頭径 1.0	同径 0.4	④平頭。網目。断面円形。頭下の胴部に隆線複数条。	近現代。
29	詰ノ段北 斜面	白磁 皿：底	1.4+	—	5.4▼	①畳付釉剥。	中国。 16c.
30	詰ノ段北 斜面	青花 皿：底	1.6+	—	—	①畳付釉剥。③高台脇に二圏線。見込に花文。	中国。 16cカ。
31	詰ノ段北 斜面	陶器 鉢カ：胴	3.6+	—	—	①淡い翡翠色。嵌入顕著。④外胴に回転方向の微凹凸。	中国カ。 15cカ。
32	詰ノ段北 斜面	土器 坏皿：口～底	2.8	10.3▼	7.4▼	①鈍橙。②精選土。④内外面ナデ。外底は回転糸切後ナデ。⑤全体に磨滅。	在地。
33	詰ノ段北 斜面	土器 坏皿：底	0.8+	—	6.0▼	①鈍黄橙。②精選土。微砂粒。⑤全体磨滅。	在地。 中世カ。
34	詰ノ段北 斜面	土器 坏皿：底	1.3+	—	4.4▼	①鈍橙。②精選土。微砂粒。④外底に板目カ。⑤全体磨滅。	在地。 中世カ。
35	詰ノ段北 斜面	土器 坏皿：底	0.8+	—	6.0▼	①鈍橙。②精選土。微砂粒。④外底は回転糸切のち板目。内底ナデ。	在地。 中世カ。
36	詰ノ段北 斜面	土器 坏皿：底	1.0+	—	—	①鈍黄橙。②精選土。微砂粒。④内底に轆轤目。外底はナデ。外底裾に刻線廻る。	在地。 中世カ。
37	詰ノ段北 斜面	土器 坏皿：底	0.7+	—	—	①鈍橙。②精選土。微砂粒。④内底に強い轆轤目。外底稍内凹み。	在地。 16cカ。
38	表採	白磁 口縁	3.3+	—	—	④口縁玉縁	近現代。
39	表採	白磁 蓋物：口～胴	4.2+	4.2▼	—	①外口縁釉剥。③外胴に円文。複突線内平行斜突線。上下端に方形突部。④型作り。口縁下端に蓋受けの突帯。	近現代。
40	表採	染付 小坏	2.8	5.3	2.3	①畳付釉剥。③外胴は上下単界線に山水文。内口縁に鉄釉帯文。内胴は上絵付で鶴文。珠文。高台脇に単圏線。高台内に「九谷」。	九谷。 近現代。
41	表採	染付 小坏：口～底	3.2	8.0▼	3.1▼	①畳付釉剥。③外胴に鳥文。内胴に吹墨桜花文。口縁端反り。	近代。
42	表採	白磁 皿：口縁	1.2+	—	—	④口縁端反り。⑥小野白磁皿C群。	中国。 16c.
43	表採	青磁 碗：底	2.8+	—	6.1▼	①内高台まで施釉。③外高台にヘラ短刻線。④削出し高台。⑥公民館付近で採集。	龍泉窯。 15c後～16c前。
44	表採	青花 皿：底部	1.7+	—	—	③外胴に唐草文。見込に複圏線。玉取獅子。高台脇に複圏線。④畳付欠損。⑥小野青花皿B1群。南登口付近で採集。	中国。 15c後～16c前

につづくので、詰ノ段の北側下端すなわち三ノ段北側から北東方向に一段降りた曲輪一带と考えられる。すると詰ノ段・西ノ段裾の帯曲輪と北東隅曲輪までを含めて「城ノウチ」と呼んだことになる。

残る「大門ノ下二ノ堀」「西森二ノヘイ」「同しノ西」はそれぞれ、詰ノ段と西ノ段の間、西ノ段の南、西ノ段の西に比定できる。面積も相応である。ここで問題となるのは「大門」の指し示す箇所である。堀切ともいわれる、詰ノ段と西ノ段の間の空間(大門ノ下二ノ堀)上部であるから詰ノ段西側に大門が該当することになる。詰ノ段の西側は土塁の存在が想定されるので、大門は現在の西南登り口が相応しい。

『南路志』では朝倉城跡について次のように記している。

「古城ノ本山式部居城ノ在社南村西山也此地人家七十余戸有

城畔谷多○水汲谷在城西北○松之谷在城北東隅○七保谷在城東○波羅谷在城南○黒岩谷在城南」

(『南路志闔國之部上巻』, 468～469頁)

本山式部少輔茂辰の居城とされ、19世紀まで70戸余りの家屋があったと分かる。周囲が谷で分断される点に注意が向けられている。

宮地森城は明治27年の登城時の様子を次のように記した。

「明治廿七年一月六日森城朝倉重松墟に陪遊す。本城臺東西十有餘間、南北東西に比すれば狭し、今開墾して麥苗生ふ。唯西崖に堀址あり、八幡宮を祭れり。崖を下下すること二間許、東西十一間、南北十九間の地あり。是れより西上數尺にして、東西廿八間、南北廿間の地あり、開拓して麥を植ゆ。西邊に高さ二間許の堀跡あり、其下に虚濠二條を穿てり。其他西北及び南に虚濠數條あり。本城臺を南下すること三壇、西より東に來る濠あり、水を瀦ふ。其の東は開拓し舊規を視ず。往昔規模の大小建築の廣狹察するに由なしと雖も、今存する所を以て之を考ふれば、規模の大建築の廣き、或は岡豊に勝ざる者あらんか。」(1935、『土佐国古城略史』, 235～236頁)

朝倉城について「重松」名が併記されている。詰ノ段が麦畑であり、20m程の間をおいた西ノ段上にも麦畑として開墾されたことが伝えられる。他に城郭施設として、北・西・南の空堀が記され、南下部の濠は水濠とされた。東麓は開墾による旧地形の改変が進んでいたらしい。また規模は岡豊に優るとも劣らんとした。

安岡源一(1935・36・59)は城郭の構造を詳しく検討しており参考になることが多い。

「通常朝倉城と人口に膾炙されて居る兵營西方の小山(城山と呼ばれる)及び、其兩側に併立せる赤鬼山と東善坊山(試験場のある山)を合併せる部分がほゞ朝倉本城と呼んでよい處である。先づ其の中心核をなす城山の状態を説明する。この山は各方面から小溪が入り込んで来て居る、水汲谷・十落谷・松之谷及び寺谷が其れである。

往事は此等の谷々に沿へる交通濠が掘られて城に上下するに使用されて居た。この交通濠は迂曲して詰ノ丸に到達すれば前面は断崖をなし、頂上を見透し又直接に登る事が不可能である。

其處は必ず袋状をなし其の片隅に入口が有り頂上に登りうる様に繩張がしてある。各方面より來る交通濠と詰ノ丸の接合點には粗いながらも斯の如き枅形が必ず用意されてある。此の城で建築物の有りしならんと推察される處は二ヶ處に過ぎない。八幡宮祠の有る東方の郭と其の西側に約三間位の細長き凹地を隔て、又一ヶ處の郭が削平されて居る。各郭は全然連結せず、純然たる當時流行の山城の面影を残して居る。

この低地は往事如何なる形状にありしか、今は桑畑と變り舊状を推察するにも、其のよすががさへ無い。多分濠の一部なりしならん。更に其れより一段低き處に古井戸が残存して居て、城兵馬洗ひの井水と呼ばれて居る。

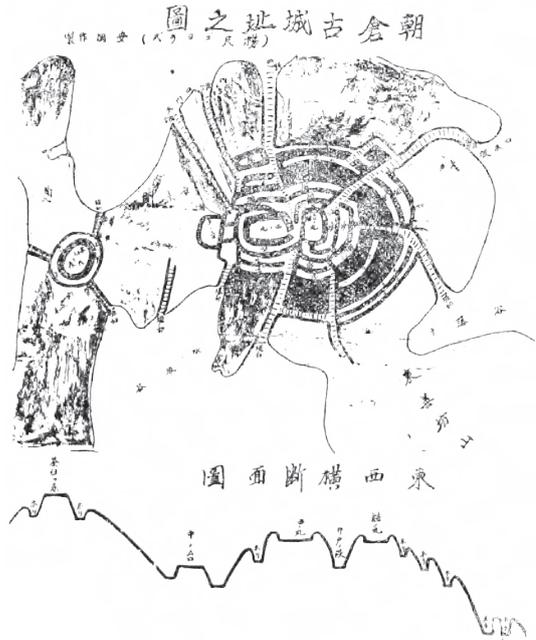
八幡宮祠の郭は圓形狀をなし、面積は西郭よりも少なきも標高は少し高し。周圍には高さ三尺位(破壊

され高さを減ず)の土壘が其の残骸を横へて居る。

其の直下には三條の空濠が設けられて居る。西郭は東部より面積は一倍位廣く又周圍の土壘も規模大きく、高さ三間である。形状は圓錐形をなし其脚下には北に五條、南には三條の空濠が掘擴されて居る。

西側には幅六間に餘る堀切を作り西山茶臼ヶ森壘と相對して居る。この堀切の北側より眞直に下る谷が有り、其の麓を大門口と呼、時往此處が北側の大城戸門の有りし處であるふ。」(安岡 1935: 84~85頁)

以上の、①朝倉城の範囲は城山と南北の赤鬼山、東善坊山(果樹試験場)までを含む、②各方向から谷が入りこむ(水汲谷・十落谷・松之谷・寺谷)、また谷を交通濠とした、③詰ノ段と西ノ段の間の空間が昭和10年頃には桑畑となっていた、④中ノ段と西ノ段の中間の北に降る谷の麓が大門口と呼ばれ、往事の大城戸門と捉えた点などは示唆に富んでいる。



第10図 「朝倉古城址之図」(安岡 1935)

また、『岡豊村史』では山城の縄張りを第一類円心式(中央に唯一つの単郭があり其れをとり巻いて、一つ又は二つの空濠がつくられている)、第二類連立式(凹形、橋門形及び方形の郭が其の間に狭い堀切をへたてて相對立している)、第三類連接式(最高部に一個の郭を設け、其の下に接続して一つ或は二つの郭が設けられている)と区分したうち、朝倉城を、楠目城や秦泉寺城などととも第二類とした。さらに朝倉城の特徴を以下のように記している。

「朝倉城は山田城よりは更に年代をくだった永祿六年一月頃迄使用されたので、其の規模は吉良森及び山田の両城よりは更に拡大複雑化の傾向をたどっている。

この城の縄張は前者二城と同様連立式とをなし、山の頂上には西側に面積の広い楕円形の郭が南北の凹形をなした堀切りを距てて東側に西郭よりは面積のせまい円形の郭が互に並立して設けられている。

又西郭の真下は幅広い堀切となり、その西方に聳える高い峯があつてその頂上には又狭い円形の郭が設けられ、茶臼ヶ森と呼ばれている。

更に東の郭の南側は標高が幾分低い尾根となつて城山との間に広い十楽谷を抱いて東西に延びている。此尾根の突端には現在県立果樹試験場が設けられているが、当時は此處にも郭が構築されていた。それは本城台の東の郭の下方から縦の深い交通路が外側から見えないように南に向つて深くほられ、試験場のある山に連絡されていた形跡が残っているのでも証明出来る。

又このような縦の交通路は西郭の下方からも深い凹路状をなして城山と朝倉神社の鎮座する赤鬼山との間にある啞内坂で西がつまって東方に口を開いた東西に細長い「みやのおく谷」に向かつて、つくられている。この交通路の北の入口を現在でも大門口の名で呼んでいる。此のような交通路は山田城にもあつて東西両郭をへだてる南北の堀切の北側から端を發して西の郭の北斜面を深くほり西方に走り更に北に少し曲ると今度は地表面に現われ普通の道となつて予岳部落の谷に降っている。

又本城の中心部にかへつて述べたい事は東西両郭の脚部を包む腰曲輪と東郭の更に東側面に東方に突出した正方形の郭の出現は吉良森城にては、附屬的郭は勿論腰曲輪等も全然ないのであるが、山田城に至ると附屬的郭が唯一個設けられるようになるが、然し腰曲輪は未だつくられていない處から考へて、本城は附加的郭の数が山田城よりは二個増加し後の岡豊城の腰曲輪程巧妙性はないが簡単な形式ながら其等の出現は、幾分でも近代化の様相を示す岡豊城の縄張りへの先鞭をつけるものと云えよう。

又本城には此時代の山城で最も困難を感じた飲料水を供給する井戸が東西両郭を区切る堀切の部分に

設けられているのも、未だにその設備をもたなかった吉良森城、山田城等に比較すると此の点でも詰ノ段と二ノ段の接続部に井戸をもつ岡豊城に近接して来ていると云う事が出来る。

以上の諸点を総合して土佐築城界の近代化の曙光はこの第二類連立式の縄張を最大限に利用した朝倉城に見え初めて、その朝がたの位置にたつ岡豊城へと進展して行くのである。』(安岡源一 1959:581~582頁)
当時の城域が南の東坊善山まで広がっていたこと、西ノ段北側の豎堀下部が大門口と呼ばれることは城郭の構造を考える上で重要な指摘である。また東斜面の腰曲輪と井戸を備える構造により、朝倉城を吉良森城・山田城と岡豊城の中間に位置づける発展史は批判的に継承せねばならない。

前田和男は一連の著述で以下のように朝倉城を記述した。

「城山の山頂に堀切をへだてて詰ノ丸、西ノ丸の二つの郭がもうけられ、これらの西方幅広い堀切をはさんで一段高い峯に、茶臼ヶ森と呼ばれている郭がある。山頂の南には低い尾根が東西にのび、ここに現在果樹園芸伝習所があるが、この付近にも郭があったものと考えられる。詰ノ丸、西ノ丸の接続点である堀切には井戸をもうけ、これら二つの郭の下方はこれを包むように郭(腰郭という)がとり囲み、更に西ノ丸の西方下には中ノ台といわれる郭を構えている。城の形式、縄張りからみると、山田城と岡豊城の中間に位するといわれる。」(1979、『本山町史上』, 98~99頁)

前田による朝倉城跡の記述は「朝倉城跡」(1990)に詳しい。要点は次のとおりである。

- ①詰ノ段は標高102mの山頂にあり、南北40m、東西30mの歪な台形である。[詰ノ段]
- ②東側に幅1.5mの虎口があり、虎口の南北両側に土塁が残る。北側の土塁は幅1mで高さが1m、南側の土塁は幅1mで高さが30cmである。[虎口b]
- ③二ノ段は詰ノ段の下位4mにあり、最大幅が20m、西~南・北・東南隅に土塁が残る。西南土塁は上部幅1.4m、高さ2.8mで残りがよい。一部に石積みが見られる。[二ノ段]
- ④三ノ段は二ノ段の下位5mにあり、幅は10~30mである。一部に土塁が残る。東南隅の土塁を伴う豎堀(幅9.2m、深さ4.5m)が三ノ段を分断する。[三ノ段]
- ⑤豎堀を降った三ノ段の下位には下方に土塁をともなう狭い段(幅3.3~5.4m)がある。土塁は東部と東南部で切れ、下部に降る通路がある東南通路の西側には空濠がある。[四ノ段]
- ⑥詰ノ段西の下位6~7mに幅20mの堀切がある。南端は三ノ段西端で豎堀状(※鞠ノ庭段)となる。堀切北端には井戸がある。[井戸ノ段]
- ⑦西ノ段は東西65m、南北40mで東の幅10mが5mほど低い。西辺は幅が狭まる。西辺の土塁は残りがよく高さ4m、裾幅8.3m、上幅4.6mである。[西ノ段]
- ⑧西ノ段の下方周囲には幅9.5~15mの段がめぐり西と北(西寄り)に土塁が残る。[裾ノ段]
- ⑨西ノ段下方の段の南下方(7~8m下)に南面第二豎堀(幅11.3m、深さ5.5m)が延びており下部ほど規模が大きい。[南豎堀B]
- ⑩南面第二豎堀を挟んだ両側に空堀があり、東の空堀は東端で南面第一豎堀(幅8.7m、深さ5m)に繋がる。詰ノ段は三ノ段・崖状地形を経て南面第一豎堀に繋がる。南面第一・第二豎堀の上端の間には東西に長い空堀があり両端が塞がる。[南区横堀1・2]
- ⑪南面第一豎堀の内側や底には石敷が見られる。[南豎堀A]
- ⑫西段下方の段の西下方(7~8m下)には堀切があり北側が土橋で塞がる。西堀切の南下位にある豎堀は本来堀切と繋がっていたと考えられる。[西堀切]
- ⑬北斜面の北面第一豎堀(幅4.5m、深さ1.6m)は詰ノ段と西ノ段の中間位置にあり、下部ほど規模が小さい。[北豎堀A]
- ⑭北面第一豎堀の東(詰ノ段北方)には三本の空堀がある。北面第一豎堀の西側(西ノ段北方)に一本の空堀が延

- び西端は袋小路状となる。[北B区横堀1～3]
- ㊦西ノ段北方斜面空堀の西端に、北面第二堅堀(幅6.3m, 深さ7.4m)・北面第三堅堀(幅3.2m, 深さ4m)が1mの間を歩いて併走し南に降る。北面第二・第三堅堀の上部(南側)には空堀があり、外(北)側は石積みとなる。[北堅堀B・C, 北C区横堀1]
- ㊧西側堀切の北側には土橋を間において北面第四堅堀(幅10.5m, 深さ4.6m)がある。北面第四堅堀には石積みがあり殊に東側上部には割石と河原石による石垣とみられる箇所がある。[北堅堀D]
- ㊨東方に下降する堅堀(幅8.9m, 深さ3.4m)の西側尾根には堀切が4条ある。堅堀は最下部の堀切と空堀に接する付近から狭まり急角度で麓に下降する。[東堅堀A・北A区堀切]
- ㊩東北に下降する堅堀と接する空堀は南側で東方向に直角に折れ堅堀となる。[東区横堀4]
- ㊪南面第一堅堀の東側に2条の堅堀があり、堅堀の下には2条の空堀がある。[東堅堀B・C, 東区横堀2・3]
- ㊫中ノ台の西側には南北の堅堀が連結した堀切があった。[中ノ段, 北堅堀E, 南堅堀D]
- ㊬中ノ台の西方160mに茶臼ヶ森が位置する。茶臼ヶ森は比高差10m, 長さ33m, 幅19mの洋梨形を呈する。裾には空堀がめぐる。[茶臼ヶ森]
- ㊭茶臼ヶ森の南東・南西に堅堀が延びる。北斜面にも2条, その北西にも2条の堅堀がある。
- ㊮茶臼ヶ森の北西には堀切で分断された2つの郭がある。

以上のように朝倉城跡の構造が詳細に記述され、大原純一氏の縄張り図とともに城郭の構成要素が漏れなく把握された。

山本淳(1980)は「…今尚山上に城濠石壇の跡が各所に残りその境域が廣く井戸など趾もあり要害堅固にして當時激戦の跡が想像せらるゝ。」(『土佐美術史』,227頁)とした。

高知県教育委員会(1984)による『高知県中世城館跡』では、現況が山林・畑・口縁, 43×45m規模, 遺存状況は不良で、詰・二・三ノ段土塁・空堀・堅堀・井戸・西の出丸があり、本山梅慶・茂辰の城とした。また五輪塔多数残存とも記されている。

高知市教育委員会(1984)による『高知市の城跡』では、

「城詰北西隅に八幡宮が祭られ、その東方にわずかに土塁の一部を残す。おそらく土塁はとりまいていたであろう。詰・西郭を囲むように大きい空堀が二重三重にはしり、堅堀も深く残り大規模な城跡である。詰の北西下には井戸も残存する。

西の出丸の茶臼ヶ森もこの郭を囲むように浅い空堀が残り、北および南には堅堀がはしり、西尾根は堀切で仕切られている。なお西郭および二ノ段, 三ノ段等にも土塁がわずかに残っている。」

とされ、周囲の古戦場や、田・宅地内の五輪塔や小祠、伊野町八代所在の本山梅慶墓への言及もある。包蔵地カードには岡豊城とならび重要な城郭である由が記されている。

村田修三(1987)は茶臼ヶ森曲輪群, II曲輪群(*西ノ段), 詰ノ段曲輪群と区分した3つの防御群から朝倉城跡の構造を理解した。東北方向の堅堀と南方向の堅堀で遮断された二重堀で囲まれた詰ノ段曲輪群を第三戦闘区域とし、詰ノ段とII曲輪は堀切と堅堀状のA堀(*鞠ノ庭段)によって強力に分断され、横堀とB堅堀(*東堅堀b)で囲まれた、詰ノ段・I曲輪(*二ノ段)・III曲輪(*三ノ段)が最終戦闘区(防御ライン)であるとした。つづいてII曲輪(西ノ段)を中心とする防御ラインを茶臼ヶ森方向を遮断した堀切を西端とする東側曲輪群であるとして、南北斜面の堅堀と横堀により敵の侵入を防ぐ構造であるとした。併せて横堀が長宗我部氏時代以降のものとして指摘した。II曲輪区域での戦闘は西端堀切土橋が最大の激戦区であるとしたが、西側の小高地(*中ノ段)については荒廃がひどいとして評価を保留した。茶臼ヶ森地域は、II曲輪から独立した曲輪群で尾根筋攻防戦の最前線であるとした。また茶臼ヶ森から西に延びる土橋で連結された曲輪を「馬出し」と指摘した。以上の三段構えが朝倉城の防

御構造であり、堅堀群による旧来の構造に堅堀と横堀により曲輪面積を大きく城域に取り入れようとした縄張りが、中世城郭から近世城郭への移行段階を示すのだと評価した。

松田直則(2014)は長宗我部氏城郭の特徴を整理する論考の中で、朝倉城跡の遺構群は『地検帳』に記載された細川宗桃他の重臣により構築されたとする可能性を指摘し、茶臼ヶ森についても長宗我部氏による築造とした。また本山氏段階の遺構を数か所の曲輪と数本の堀切・堅堀等と考えた。

第2節 朝倉城跡の曲輪配置

前節の内容を整理すると、まず『地検帳』の各箇所を比定することにより朝倉城の「城ノ内」を把握することができた。また朝倉城跡の構造については、安岡源一の成果を踏まえつつ前田和男が網羅的に整理しており、城郭の構成要素がほぼ把握可能である。また村田修三が提示した、城郭の各区域を異なる機能を備えた防御施設として捉える観点は、朝倉城跡の城郭構成は区域ごとに捉える必要性を示した。以上を踏まえ朝倉城跡の曲輪構成を第11図のように整理した。以下に内容を示す。

「城ノ内」と記された範囲を「主郭」と呼ぶ(図中太線)。主郭の周囲斜面に各種防御施設があり、細長い尾根を挟んだ西側には「茶臼ヶ森」がある。

主郭の中心は「詰ノ段」である。詰ノ段の出入口は、現在の石碑がたつ西南部の一箇所(虎口a)と北東土塁の中間切れ目の一箇所(虎口b)がある。虎口aが『地検帳』の「大門」にあたる。詰ノ段には北西(城八幡土塁)と北東(北東土塁)に土塁が遺存する。本来は全周していたという。

二ノ段は詰ノ段下方の東区側に位置する鉤形の曲輪である。詰ノ段とはテラス状の段をもつ虎口bでつながる。西南辺で土塁がよく遺存している。

三ノ段は二ノ段の東区側下位に位置する鉤形の曲輪である。裾ノ段との接点が道場ノ段にくだる虎口fとなる。南中央に東小堅堀aがあり三ノ段を東西に分断する。東小堅堀aは東辺に土塁を伴い、北端上部の小さな段と土塁が虎口eを構成する。

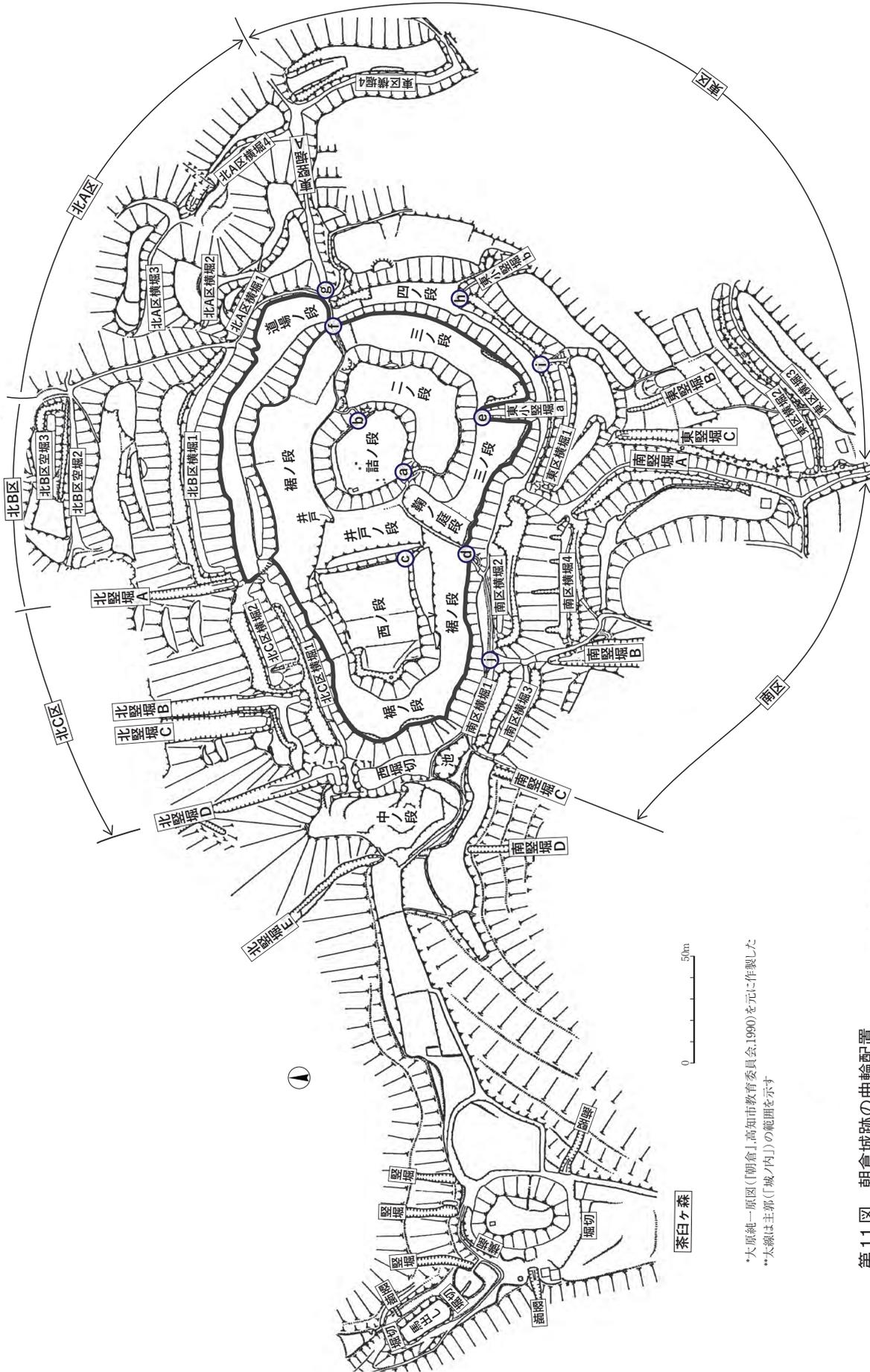
鞠ノ庭段は、三ノ段の西端に接して一段高い曲輪である。名称は『地検帳』の「鞠之庭旦」により表現を「ノ段」で統一した。虎口aの直下にあたるが連結はしていない。

井戸ノ段は、詰ノ段と西ノ段のあいだに位置する、堀切ともされる平場である。名称は安岡源一(1935)による。北端に接する井戸は一段ひくい裾ノ段のレベルにある。南側は緩く傾斜して裾ノ段に繋がる。

西ノ段は、井戸ノ段を挟んだ詰ノ段の西側に位置する曲輪である。規模は詰ノ段に優る。やや幅を減ずる西端には土塁がよく遺存している。土塁の内縁に沿って溝がめぐる。西ノ段の平場には段状の高低差があるが詳細は確認できていない。井戸ノ段に面する東辺の南端がスロープ状の虎口cとなる。

西ノ段の下位を取り囲む帯曲輪を裾ノ段とする。裾ノ段は独自に名称を付した。西ノ段北側の裾ノ段には複数の段差が設けられている。裾ノ段は詰ノ段の北側にまで延び、虎口fに接する。裾ノ段は詰ノ段と西ノ段で共有されており、朝倉城跡の主郭をもっとも特徴づけている。裾ノ段の範囲は南区・北区に対応している。主郭南辺中央の裾ノ段東端には虎口dがある。現在も登り口として利用されている細いスロープにより下位と連結される。

道場ノ段は、裾ノ段下位の北A・B区に対応してのびる帯曲輪である。名称は『地検帳』にもとづく。道場ノ段の東南端は虎口f、虎口g、東堅堀Aとつながる城の出入口である。道場ノ段比定区域から西に延びる細長い平場は、中間に明確な境界が認められないため、一連の曲輪と捉え道場ノ段に含める。

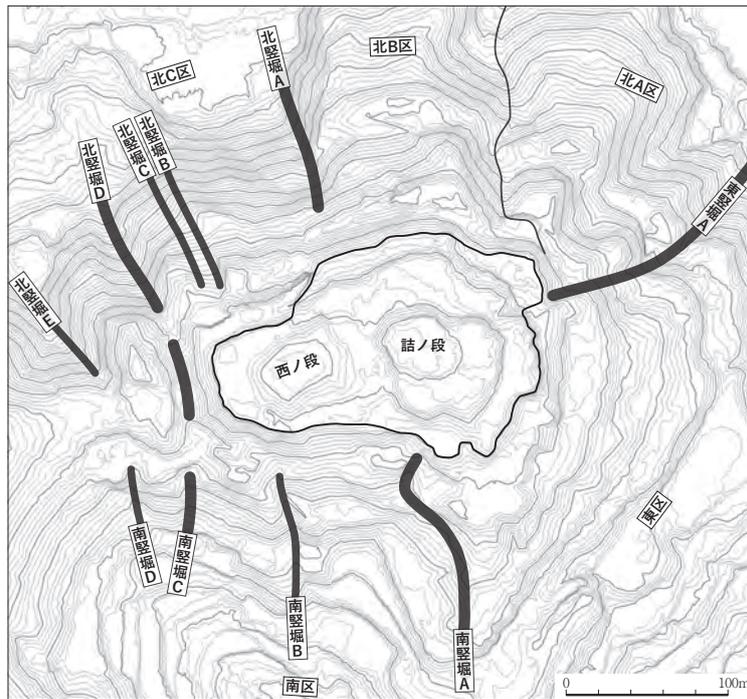


*大原純一原図(『朝倉』高知市教育委員会1980)を元に作製した
 **太線は主郭(「城ノ内」)の範囲を示す

第11図 朝倉城跡の曲輪配置

以上の三ノ段、裾ノ段と下位の道場ノ段までが城郭の中心となる主郭(城ノ内)である。

主郭の西は長大な西堀切(地元では男池と呼ばれる)で区切られている。西堀切の北側は土橋を挟んで北堅堀Dが伸び、南は南区横堀1の延長である池(女池と呼ばれる)を挟んで南堅堀Cが伸びるなど、主郭の西側を明確に分断している。主郭から西堀切を挟んだ西側には中ノ段が位置する。中ノ段の中央には複雑に掘られた溝や土塁があるが構成の造作とみられ、曲輪として利用されたかは定かでない。



第12図 朝倉城山の地形と斜面境界施設

主郭の周囲斜面には堅堀・横堀などの防御施設が配置される。村田修三が指摘したように区域により構成と正確が異なるので区分して内容を把握するのがよい。西堀切・北堅堀D・南堅堀Cの西境界より東側の斜面は、長大な堅堀及び谷によって分割されており、大きくは東堅堀Aと南堅堀Aが境界となって、それぞれ北区(北堅堀D～東堅堀Aの間)、東区(東堅堀Aと南堅堀Aの間)、南区(南堅堀Aと南堅堀Cの間)と区分できる。北区はさらに、堅堀と谷を境界に内容の異なる各区域に区分できる。東堅堀Aから現在北側からの登城路となっている谷筋の間が北A区、登城路の谷筋から北堅堀Aまでが北B区、北堅堀Aから北堅堀Dまでの間を北C区とする。各区は地形的に特徴に応じて構成に違いがある(第12図)。

東区は、長大な横堀を上下に連ねることで麓からの進入を阻む構成をとる。東区は二ノ段・三ノ段に対応する区域であり、四ノ段と独自に名付けた狭い段も最上段にあつて横堀の機能を果たしたとみられる。第11図には明示されないが、四ノ段の下位にも大きな高低差をもつ横堀が3～4条上下に並ぶ。三ノ段と四ノ段の間には東小堅堀aがあり虎口eとして上下の進入路となる。四ノ段にも東小堅堀bがあり虎口hとして下位の横堀と連結される。四ノ段の南半部にめぐる土塁は中間に切れ目があり虎口iとして下位の横堀と連結される。東小堅堀aの南方は東善坊山(現在の果樹試験場)に向かって尾根がのびる区域であり、東区において特に嚴重に防御された箇所である。土塁の直下には東区横堀1があり、下位に平場をおいて、2本の堅堀(東堅堀B・C)が横並びに尾根を縦に刻み、堅堀の下位を2本の横堀(東区横堀2・3)が遮断する。東堅堀Cと南堅堀Aは高低差が甚大で東区と南区は完全に分断されている。東堅堀A下端付近の東区横堀4は南側で下方に向かって直角に曲がっており、麓から登城路としての東堅堀Aに進む通路の役割を併せもったといえる。東区については空白部分の横堀と上下移動のための小堅堀や虎口の有無・状態をさらに確認する必要がある。

南区は全体が水汲谷につながる谷地形である。中間には小谷を掘削し長大な堅堀とした南堅堀Bがあり、南区横堀1と接する上端は高低差により迂回を余儀なくされる虎口jがある。虎口jは土塁と主郭の切岸により大きな門が構築されていたとみられ、虎口dから主郭に上がるための重要な進入路であったと考えられる。南区横堀1は規模は小さいが障子堀となっており、西端は池状の巨大な凹地(女池)となっている。南区は全体が谷地形であるため傾斜がきつい。横堀は上下の二段構え(南区

横堀1・3と2・4)である。南堅堀Aは上部で直角に2度曲り、上部の屈折部分が南区横堀4に接する。南区横堀4は上方に小さな堅堀が複数条つく。上端は東区四ノ段と南区横堀2の接点となる。

北A区は東北方向にのびる尾根筋であり、東堅堀Aとの間には相対的な小さな谷がある。北B区との間の谷は長大で完全に分断されている。東北方向に主要な尾根筋は3条の横堀(北A区横堀1・2・3)に切られている。3つの横堀の尾根筋上位には道場ノ段が構えられている。小谷と東堅堀Aの間の尾根筋には東区横堀4のレベルに北A区堀切4が刻まれている。前田和男や大原純一は北A区の横堀を「堀切」としており尾根を分断する点からいえば適当であると思うが、むしろ斜面に近い地形であり、他の区域の横堀(空堀)と同類であるとみられるため、横堀と記述する。

北B区は北A区と同規模の尾根筋である。詰ノ段の北面にあたる区域であり、長大な横堀3条(北B区横堀1・2・3)が上下の進行を完全に遮断している。

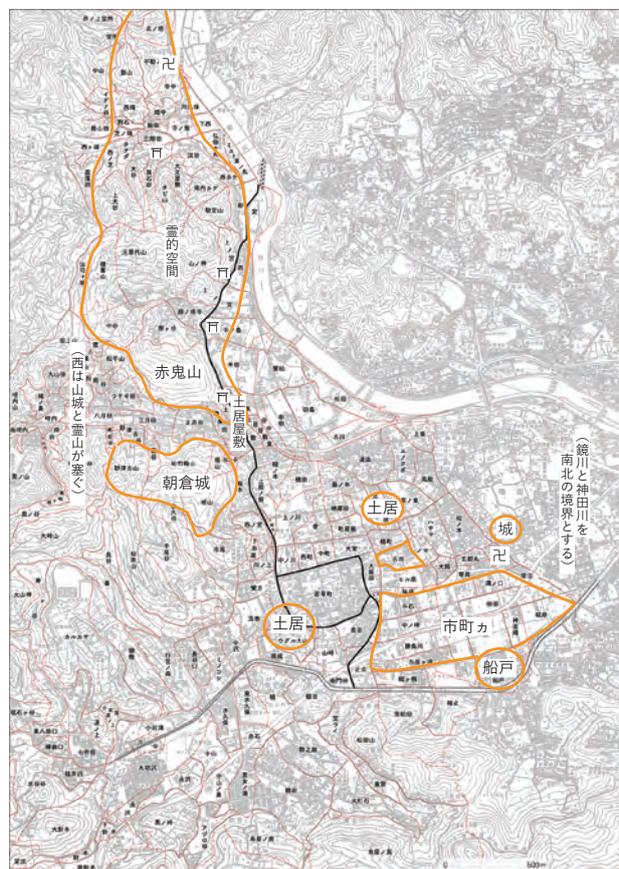
北C区は南区と同様に全体が谷地形に該当する。西ノ段の北面にあたる区域である。主郭直下に北C区横堀1があり、下位には2条の堅堀(北堅堀B・C)が延び斜面を東西に分断する。分断された東側の斜面には北C区横堀1の直下に横堀(北C区横堀2)が掘られ、下部斜面には複数の腰曲輪が構えられる。同様の腰曲輪は分断された西側斜面にも構築された。北堅堀Dの下端は、安岡源一によれば大門口の地名を持つという。

茶臼ヶ森は、主郭とは構成原理が異なる。斜面には堅堀を配し、裁頭円錐形の曲輪の周囲には横堀をめぐらす。南の尾根とは堀切で分断し、北東方向の尾根には馬出し状の曲輪を配置し防御している。

第3節 小結

以上、朝倉城跡についての既往の認識を整理した上で、曲輪配置についての現時点での所見をまとめた。朝倉城跡の構造上の特徴は、詰ノ段と二ノ段が並び立つ曲輪の構成にあるが、しばしば比較される秦泉寺城跡や楠目城跡とはことなり、2つの曲輪が裾ノ段という下位の曲輪を共有している。構造上、二ノ段を経ずして詰ノ段に侵入することも可能であり、他とはことなる独自の構造をもつと評価できる。井戸ノ段の原地形、二ノ段の内容と性格、裾ノ段内の施設配置などを発掘調査によって明らかとし、城郭の構造を具体的に解明していくことが今後の課題である。

また、このたびの検討で、詰ノ段に面する東区と北A・B区は長大な横堀で外敵の侵入を強く阻んでいることを確認した。すると、虎口g・f・bに向かって麓から真っ直ぐ詰ノ段に向かうことができる東堅堀Aの役割が問題となるが、東堅堀Aを降った先には朝倉神社があり、地名の比定によれば朝倉神社の参道は「土居屋敷」である。このように城郭構造の検討には、城郭そのものの詳細な検討に加えて、城下



第13図 朝倉城下町空間概念図

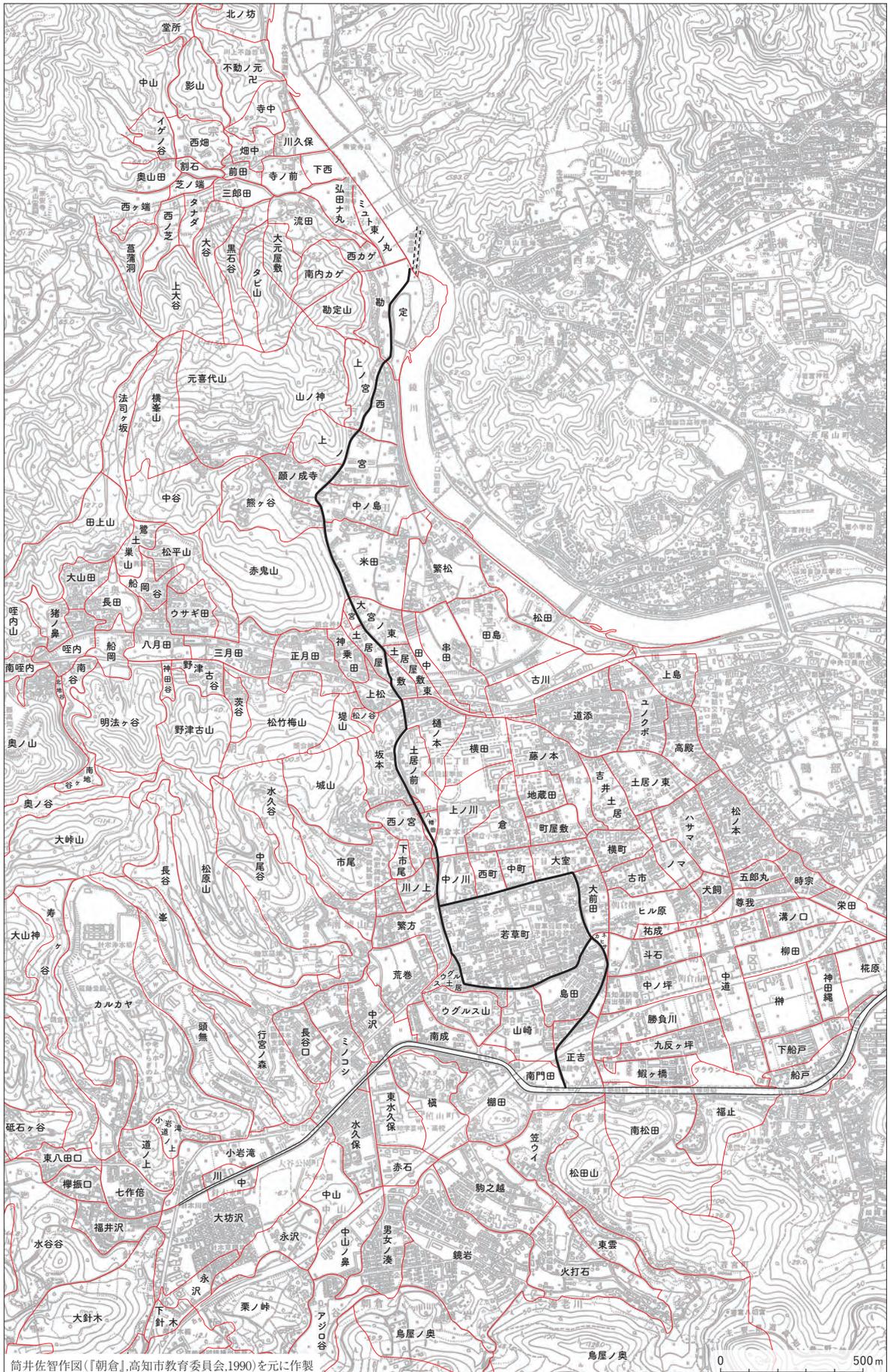
との関連も考慮しなければならない。

中世朝倉城下町について具体的な検討がなされたことはなく今後の課題であるが、ホノギをみると前述の「土居屋敷」の他に「吉井土居」「ウグルス土居」「古市」「町屋敷」「船戸」といった地名があり、また本山氏所縁の宗安寺や朝倉神社などを含めて、城下町の構成を検討する手掛かりはある(第13図)。また、安岡源一(1935)が試みた城郭ネットワークに眼を向けると(第15図)、配下の鶴来巢城、朝倉と本山を結ぶ城郭群、同じ丘陵の西端に所在する音竹城など、朝倉城の機能を城郭の関係の中で捉え直す必要があるだろう。

現時点では朝倉城跡を中心とした中世の都市空間を第13図のように認識している。朝倉城跡と周辺の調査を進め、朝倉城からみる土佐の中世史を一層深く追究したい。

表2 朝倉城跡関連年表

1478	文明10	一条教房下向。	1569	永禄12	安芸城落城、国虎自害。香宗我部親泰が安芸城主に。一条氏から蓮池城を奪取し、親貞をおく。
1480	文明12	一条教房死去。 本山氏、文明年間(1469～87)に江ノ口まで進出・若一王子半鐘。	1571	元亀2	津野勝興が長宗我部元親に屈服。
1507	永正4	管領・土佐守護の細川政元暗殺、土佐細川氏上洛。	1572	元亀3	一条兼定 v.s. 西園寺公広。
1508	永正5	本山養明・大平・吉良・山田氏が岡豊城に侵攻、長宗我部兼序討たれる。国親は一条家の保護下に。この頃本山茂宗生誕。	1574	天正2	一条兼定を豊後に追放。
1518	永正15	長宗我部国親、岡豊城に帰還。	1575	天正3	渡川合戦、一条氏滅亡。 野根氏を討ち土佐を統一。
1526	大永6	安芸氏が香宗我部氏を降す。	1585	天正13	元親、伊予河野氏を討ち四国統一。 元親、秀吉に降る。これ以前に大高坂城へ。
1527	大永7	この頃、本山茂宗、朝倉城を本拠に。本山城は茂辰に譲る。	1586	天正14	元親、戸次川合戦。本山親茂敗死。
1536	天文5	この頃までに本山茂辰と国親の娘が縁組み。	1587	天正15	元親、土佐一国の検地を開始。
1539	天文8	一条房家死去。	1590	天正18	元親、北条討伐に従軍。
1540	天文9	この頃、本山茂宗が吉良氏(芳原城・吉良城)を降す・荒倉神社棟札。茂辰が吉良を継ぐ。本山城主は茂宗の弟・茂定。	1592	文禄1	元親、浦戸城を本拠地に。朝鮮出兵。
1541	天文10	一条房冬死去。	1596	慶長1	元親・盛親、「長宗我部氏掟書」制定。 サン＝フェリペ号事件。
1542	天文11	茂宗、大高坂氏(大高坂城)を降す。	1597	慶長2	元親・盛親、再び朝鮮出兵。
1544	天文13	茂宗、潮江庄・森氏を降す。 茂宗、津野氏を援け須崎で一条氏と戦い撤兵。	1599	慶長4	元親、京都で病没。
1546	天文15	この頃、本山茂宗が大平氏(蓮池城)を降す。	1600	慶長5	盛親、関ヶ原合戦で石田方につき敗走。 山内一豊、土佐国主に転封。浦土一揆平定。
1547	天文16	この頃、長宗我部国親が天竺氏(大津城)を降す。横山氏(介良城)を降す。	1601	慶長6	一豊、浦戸へ入城。
1549	天文18	一条房基死去。 この頃、長宗我部国親が山田氏を降す。			
1551	天文20	吉良城主・吉良宣経死去。			
1555	弘治1	本山茂宗(梅慶)死去・宗安寺位牌。			
1556	弘治2	長宗我部国親、秦泉寺氏を降す。 茂辰、賀田城に城番を置く。			
1558	永禄1	長宗我部国親・元親、国分寺金堂を造営。この頃、長宗我部親泰が香宗我部氏を継ぐ。 茂辰、芳原村若一王子を修造。			
1560	永禄3	長浜戸の本合戦。本山氏、長浜城・浦戸城を失う。秦泉寺城・久万城・福井城・大高坂城・国沢城を失う。 長宗我部国親死去。元親、木塚・秋山・吉原・森山・西畑・仁野村に侵攻。神ノ森に侵攻。 一条兼定、元親の助力を得て蓮池城を奪取。			
1561	永禄4	元親、大黒氏(杓田城・比治城)を降す。 石立城・神田城を奪取。			
1562	永禄5	9月朝倉合戦。本山貞茂の活躍。			
1563	永禄6	1月本山氏が朝倉城を焼き本山城へ撤退。 安芸国虎が岡豊城攻め失敗。長宗我部親貞が吉良城主に。			
1568	永禄11	本山氏(瓜生野城)、長宗我部元親に降る。			



第14図 朝倉地区ホノギ推定位置図



第15図 中世城郭分布図

参考・引用文献

- 荻慎一郎・森公章・市村高男・下村公彦・田村安興, 2001, 『高知県の歴史』, 山川出版社
- 高知県教育委員会編, 1984, 『高知県中世城館跡分布調査報告書』
- 高知市教育委員会編, 1984, 『高知市の城跡』高知市文化財調査報告書第4集
- 高知市教育委員会編, 1990, 『朝倉』高知市文化財調査報告書第10集
- 小林健太郎, 1981, 「戦国城下町論—土佐国の事例を中心に—」『日本城郭体系別巻Ⅰ』, 新人物往来社, 259～275頁
- 西山晴視, 1971, 『土佐の古城』, 高知新聞社
- 橋詰延寿・山崎進・島田豊寿・安岡大六, 1967, 「高知県の城」『日本城郭全集13』, 人物往来社, 107～208頁
- 前田和男, 1958, 『高知市史上』, 高知市
- 前田和男, 1970, 『高知県の史跡と文化財』
- 前田和男, 1971, 『高知県史古代史編』, 高知県
- 前田和男, 1979, 『高知市の文化財と旧跡』, 高知市教育委員会
- 前田和男, 1979, 『本山町史上』, 本山町
- 前田和男, 1990, 「朝倉城跡」『朝倉』高知市文化財調査報告書第10集, 49～61頁
- 松田直則, 1987, 「高知県における中世土器の様相」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』, 中世土器研究会, 155～173頁
- 松田直則, 1999, 「土佐における虎口の出現とその展開—芳原城跡の虎口調査から—」『織豊城郭』第6号, 織豊期城郭研究会, 91～107頁
- 松田直則, 2003, 「土佐の戦国時代と長宗我部元親」『戦国時代の考古学』, 高志書院, 369～382頁
- 松田直則, 2014, 「長宗我部氏の城郭—土佐における織豊期城郭から近世城郭の成立—」『中世城館の考古学』, 高志書院, 361～374頁
- 宮地森城, 1935, 『土佐国古城略史』, 青楓会
- 武藤致和編著, 1813 (1959), 『南路志 閩國之部上巻』, 高知文教協会
- 村田修三, 1987, 「高知県」『図説中世城郭事典 第三巻』, 新人物往来社, 235～253頁
- 村田修三編, 1987, 『図説中世城郭事典 第三巻』, 新人物往来社
- 安岡源一, 1935, 「朝倉城塞と朝倉合戦」『土佐史談』53号, 土佐史談会, 72～95頁
- 宗用山人(安岡源一), 1936a, 「地理的に見たる本山氏の盛衰(上)」『土佐史談』56号, 土佐史談会, 88～114頁
- 宗用山人(安岡源一), 1936b, 「地理的に見たる本山氏の盛衰(下)」『土佐史談』57号, 土佐史談会, 81～105頁
- 安岡源一, 1959, 「岡豊城を中心とする土佐の城郭」『岡豊村史』, 岡豊村, 561～608頁
- 山本淳, 1927, 『土佐美術史』, 歴史図書社
- 山本淳, 1951, 『高知県史上』, 高知県
- 山本大他, 1979, 『日本城郭体系15』, 新人物往来社
- 『土佐古城記』(天保13)
- 『土佐古城伝承記』(『皆山集』2)
- 『南路志：閩國之部』巻7, 4(高知県文教協会, 1959年)
- 『土佐物語』巻2, 4(国史研究会, 1914年)
- 『土佐国編年紀事略』巻5
- 『土佐郡朝倉庄地検帳』(天正16)

報告書抄録

ふりがな		あさくらじょうせき						
書名		朝倉城跡 I						
副書名		第1・2次調査報告書						
シリーズ名		高知大学考古学調査研究報告書						
シリーズ番号		第1集						
編著者名		宮里 修						
編集機関		高知大学人文社会科学部考古学研究室						
発行機関		高知大学人文社会科学部考古学研究室, 高知市						
所在地		高知県高知市曙町2丁目5番1号						
発行年月日		2017年7月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あさくらじょうせき 朝倉城跡	〒780-8064 こうちけん 高知県 こうちし 高知市 あさくらじょうま 朝倉城山丁 109・110・141番地	39201	010005	33° 32' 57"	133° 28' 48"	2015. 9. 17 ～ 2015. 9. 23 2016. 9. 15 ～ 2016. 9. 25	13m ²	学術調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
朝倉城跡	城館跡	中世 近代	溝 土坑 ピット	2条 2基 1基	白 青 青 土 陶 鉄	磁 磁 花 器 器 磁 製 品		
要約	土佐戦国時代の本山氏・長宗我部氏の城館であった朝倉城跡の発掘調査を実施した。詰ノ段の測量調査と3ヶ所13m ² に対する発掘調査を実施した。T1では戦国時代の遺物包含層を検出し、また2つの遺構面を確認した。T2・T3では中世層は検出できず遺跡の遺存状況についてのさらなる確認が必要である。							

写真図版



① 朝倉城跡遠景(東から)



② 朝倉城跡詰ノ段遠景(西から)



① 詰ノ段西南部入口墨(南から)



② 詰ノ段西側(南から)



③ 台状部(東から)



④ 台状部張出し(北東から)



⑤ 城八幡土塁(北東から)



⑥ 北東土塁(南西から)



⑦ 虎口b(東下方から)



⑧ 虎口b下空間と降り口(南から)



① 測量調査風景(2015年度)



② 測量調査風景(2015年度)



③ 測量調査風景(2015年度)



④ 測量調査風景(2016年度)



⑤ 測量調査風景(2016年度)



⑥ 測量調査風景(2016年度)



⑦ 測量調査風景(2016年度)



⑧ 測量調査風景(2016年度)

写真図版4



① T1 設置状況(南東から)



② T1 表土除去状況(東から)



③ T1 遺物出土状況(青磁片, 東から)



④ T1 遺物出土状況(土器, 北から)



⑤ SK1 (北から)



⑥ SK2 (北から)



⑦ SK2(左)・SD1(右)土層断面(北から)



⑧ SD1土層断面(南から)



① T1完掘状況(東から)



② T1南壁土層断面(北から)



③ T1南壁土層断面(北から)



① T1北壁土層断面(南から)



② T1東壁土層断面(西から)



③ Pit1(北から)



④ T2設置状況(南から)



⑤ T2表土除去状況(南から)



⑥ T2Ⅱ層上面遺物出土状況(東から)



⑦ T2Ⅳ層露出状況(南から)



① SD2完掘および遺物出土状況(南から)



② SD2完掘および遺物出土状況(東から)



③ SD2東壁土層断面(西から)



④ SD2西壁土層断面(東から)



⑤ T2中段完掘状況(東から)



⑥ T2上段完掘状況(東から)



⑦ T2下段完掘状況(東から)



⑧ T2中段完掘状況(東から)



① T2完掘状況(南から)



② T2西壁土層断面(東から)



③ T2東壁土層断面(西から)



① T2北壁土層断面(南から)



② T2東壁中段土層断面(西から)



③ T2東壁下段土層断面(西から)



④ T2南壁土層断面(北から)



⑤ T3設置状況(南から)



⑥ T3表土除去状況(北から)



⑦ T3完掘状況(北から)



⑧ T3北壁(上)・東壁(下)土層断面



① 発掘調査風景(2016年度・第2次調査)



② 土層断面図作成風景(2016年度・第2次調査)



③ 現地説明会(2015年度・第1次調査)



④ 現地説明会(2015年度・第1次調査)



⑤ 現地説明会(2016年度・第2次調査)



⑥ 現地説明会(2016年度・第2次調査)



⑦ 調査参加者(2015年度・第1次調査)



⑧ 調査参加者(2016年度・第2次調査)



T1 · T2 · T3 出土遺物



詰ノ段北斜面

詰ノ段北斜面收拾遺物・表採遺物

高知大学考古学調査研究報告書第1集

朝倉城跡 I

— 第1・2次調査報告書 —

2017（平成29）年7月31日

編集 高知大学人文社会科学部考古学研究室

発行 高知大学人文社会科学部考古学研究室

高知市曙町2丁目15番1号

電話 088-844-8211

高知市

高知市棧橋通4丁目14番3号

高知市立自由民権記念館内 民権・文化財課

電話 088-832-7277

印刷 弘文印刷株式会社